



發句兄弟集
附錄卷一



5
2239



明利5
番2238
本



句兄芳序
悉ハ精ナリ精ハ及ナクモ詭セシ
より〜業スルもの類作新
古混雜〜〜ひらり〜〜
は譜〜〜〜〜
厚乃吟を狂〜
点の付

明治四十一年五月十四日
富山房記念心氏寄贈

佗乃悔と暮とありとさ終と
むう—今此高芳乃夷色
あれ句不三十九人を多あひ
あまおの—をつらやうと
おほやげの身のさる才ある詩
乃式と—何とせと私と及特の
一解と—物と—く註解を
加へた—と以存佗例乃特

換との流俗と—能ひ侍と—
向壁と—馬と—句解と—と
聊乃—をユと—と
の難と—の—と—
式のおと—の—と—
か—女子と—鄙—の—と—
切字と—の—と—
逸真と—の—と—祝鮫の侍

ありまゝ——は乃の譬喩方便
南無を徳能一智也 詠句兄
中へとちなる海をさるるあり

昏の名を——侍る

元禄七甲戌稔委尾初五

晋其角

一番

兄

貞室

こぼりくはるるものよ〜おん

弟

晋子

こぼりくはるるものよ〜おん

花満山の系を上五字と云と重て
芳野山と決定——る所作者の自
然地をゆゑるなりを詠諧の以海山

あるく——花のよき望と云ふ對句は
ちるもちくくといへる和句やをハクと
たうまの云下——紙反持せしもの
兼云吉野山一句の本辨とて上五字
七字までハ只ありの詞なる——ちるもと
梅のうをようつ——本意通句ある
へ——答云句ハ其真を因るへよや
景情のちあるもといふや 離談集
論せばことくや近くいとも先年
の星やさく定めぬ山い——と

云——句尚なまの興感せたり紙
芭蕉翁吉野山よあそへる時山中乃
羨景よけをされ古きすとの信と感
せ——叙^{ツイテ}の星の山う——は明あるや
け句のう——やま——さく——は文通ふ
Pされば是をう——の面目よなし
おもふ時ハ満山の花よかひぬへ一句
乃含ハあ——のや花の前後と云時ハ
聊も句心あやま——況佳期ハ
句を盗む癖とハ等類をの——違ふ

二番

兄

拾穂軒

地主くく木の間の花の都の都の都

弟

京中へ地まのさくくや飛胡蝶

老師名まき句く及狩りて市中は蝶を
清水の落むと見えなすも木のと
云字なりて好まざる侍の例

こころはぬてたのるを飛かすやうな
笑也先後の句立くくや飛花の蝶
よ似る。蛺蝶飛来過牆去却疑春
色在隣家 他例多く因ゆさす
京の一字は心ひくたを殺るよ
三番

兄

素堂

又是よまき蝶一見と なり弟の

弟

亦是よき本居一見のほり一丸

遊子行、残月とや花よおほきし人の
去のなれを惜みん心をさへひける
予う句うとひよとてまじ一見
とつ花のかへるさげとありゆへ全等
類ありんとなのたりと素堂の平生
口癖ありは是を格よみ取るとは
云題よてまよつと花のなれもま
一は句と味かたるる下五字乃

云のへめて強弱の辨をわつものや

四番

兄

肅山

祐成の袖引のを勢あつ千鳥

才

むらちととも其おの寒し一虎、許モト

袖引のをせと一衣洗濯の時ある人
さびりし高名乃士ありは破襦えん袍

残著て孤貉平耻さる勇を思ひ合
ふるまよや村を多き友としてこの志
を志のちれ——一句は感解ありありて
其おハ虎のものと志はなれ 神代
引のまじきんとおのいかりて冬のおの
川ぬ実とのうこまて追及せし是ハ
各句合意乃辨之兄の白子寒——也
いふ字の少くて聞し付也そこあるの
句ありあま——

五番

兄

伝説

雨乃日や門提てりかきつを

弟

簾おけ句は控まらる。杜る

杜若雨潤乃一辨時節いささやく云
立これとも強いていさ雪中の梅花を
のさ——園歌よけ——を打 添俗の
句中よさうまれて二句の外に 作

らす—きれを向上の毎に於てハ歌
と定めぬ—て其心ゆ—うある—ひ
多うる中—平杜忌景物乃一品あり
を吳もよりも眞を取ぬへくや雨乃
杜忌とおひいあ—ん—句他のこ
なり—あ—手ぎい—あ—お新—老功の
作者誠譏りてい—あ—あ—い—回けて
おくと見送—り—む乃我宿—
入来—心—反—ユ—て—むの—あ—もそ
の—あ—色—も—ま—も—厭—げ—れ

さ—海—城—す—れ—ま—げ—と—知—し—る
なり往と来との二字ありて力強
わの—も—と—と—判—談—せ—ん—人—あ—と—ある
—い—回—答—の—句—な—る—お—く—つ—り—て

六番 松棘の愚さを中侍

兄 曲水

三絃や—の—山—城—佳—月—雨

分

こ味—^{子マキ}—縁—や—宿—衣—よ—く—む—む—五—月—毎

さういふれの長閑よびとよと読ける
さのよもりも降るあて同く
あるもさうしつと群平川智也
三 因おる同くさるるのちく
乃玉水よかもしつと物うらま
思ひよもさるやそれをうぬ
りありおるりて困死の音よ
侍るおくと一人の五月あ
ひなりて何とあく麻と
はると思ふ心と侍る倦

七番

忍ぶのうひ決せよ

兄

禅寺乃善平心やほお主

客あり奇や心哉お平うき花

が鏡句よさく何あり古来八下
あつむ五字を今あり只あり
云流一花思庭の乱お

よせしこも毛吹時代の老僧とあるを
祈望なるもそはやくそ身立と
句より入る真の守城とよふや

八番

兄

露沾

陰惜よ所走の菊は齡のち

才

秋平あへ師走の菊も麦白田

中七字 モチハヤ 詠を以て一歳如昏の惜

まろく詠を以て霜雪の凋むふ
後る對をいそはつるはる也
秋後の菊城よそよなり久次女と
句とくちよ立り也菊の情うら
しと光陰を惜むと待とをこり終

九中

兄

岩翁

遠磨忌や新りよ僧の乳は師

才

なを磨るゑや自利はらざるの鏡

論スル俳句ヲ如シ論カ禪ヲ日乃影と水影

羨ふるあ——空房獨坐の似て

十卷

似ぬは二句一物な

又

千瓜や汐のひるの於小舟

舟

ほ——瓜やうらけてはあ蚤小舟

此舟ハ古来掉頭の秀リ他りして

と云くよ云な瓜はと等暮の難非

のう程うて是く待きとも千浮の舟

やと海なる縁をすうらそおのりやう

つあけて千さも海あま兄の句を

こころもも千あま——舟の形容

汐と云一字のけしきもも反轉せり

みる人もまきつるやう

懐古吊古あるを

十一卷

兄

杉風

扇形舟上如く梅散るるを利

才

屋形舟に花見ぬ女中出まらり

暮春の至情とあはぬハ梅をうりも
名よむと云はまよりて風光いつ
花中ちりる人のあはほねる
浅州上野と白對して渭北春天樹

江東日暮、雲とつふ句哉か里をた見
ぬ中ちりる人後う梅——と梅と
おもひやせをいふよりつ——とさきり
春をたのきあけん山水道遠の人
十二巻 興趣句外よあり

兄

杜國

馬ハ如色牛ハ夕日の北に

弟

染ハ如色牛ハ夕日の北に

け二句ハが〜ひを云とま〜とよて
お葉多く閑〜ゆるきとよとる〜進
牛緩ク歩〜て斜陽のこせりと見
風景と葉の〜つのお〜ぬて牛ハ
さあ〜時雨をき〜せ〜あね〜
そと〜おつきゆるや

十三番

句の面よ〜見せ〜し〜

兄

神叔

うつ〜火よ土器き〜 句このな

弟

埋火やう〜ひかけて〜いぢうやよ

兄ハ炉を造の雨野濡〜院の友哉
〜てな〜る〜るのあり〜海言か
お〜い〜いぢう焼い〜の〜とよ
〜ん古人の真を今の俗言よ〜あて
句おといふ句のほひをわちぬ柴
火三盃乃〜の〜やお祈〜ふ
ふ〜り〜り冬夜節事の及階〜

十亦也

兄

古梵

ふの村のあえう浮るを鳴るが

弟

あをうと八麻をみるらんなるを忠

窮民故あを流む田家の神降ゆよ
下愚のうつくさな心を用ひてひまをよ
ぬるこの音さくは哀なり林をけり

とふ人もぬしと悲れん^{アハム}悩農の

至誠をよと予そのうたひを起て

る歎よとえ性を一つよりけりもの

とと憐れり列子は鷗心をあるや

事なる事實をとり一句の先好を

十五番

兄

許六

人支平 醫師乃裕や衣更

弟

法体も島の下着や衣かえ

二句とも目くらましの平一思ひ
よせらるゝ自句節小袖なまもさるゝ
也と勘弁せしつゝも数句のけうあひ
衣ふといそてハ花なり法体と数句
とのをれつゝま一さつたれも無こと
心あはれと一列にけり

十六中

兄

去來

浅茅生や海らり手下たむの声

舟

海らり手は松虫さうけ浅茅か

明をまててもゐて因一虫のの

あはらうなほようめ一ふくな寂蓮

近く虫ののをやめて秋情をうめる

心を一句の上は云流して海らり手

しる人洞観のまよこゝろしる辨

遠近りてそと折平少狭さのけし
あつらも各句各ささたのそと

十七番

兄

自我

海棠乃をたる満きり夜乃月

才

海棠花のうつやおほる月

驟をさると云字は満ると云字は通
ハして海月のたぬまを春無
なり然れ一句のこいしお新あまを
自句よとめて優越は句のうつを
趣向も少りも一つなれもみちる
云る新をうつや勝とてあす
時ハ虎や煙花や雪と立のびる
境又分別はる先達のうつさる
詞平吟心越のそとめ給ふも
精さのこととや

十八番

兄

立圃

おひつりさしとよみける 立圃うた

中

花ひつり袂に御乳のちゆりけ

至愛乃心より作者の功をあはれし
一つももやりの初めやすうたる所
又あき妙句なると都鄙より

句よ曇ちりされどもあつちの
後句を珍賞せりていつくは古版
の書子埋もせ侍係を予歎羨して
古人の深窓を再轉せりお乳の人の
ちゆりけを物いそぬ童なれと袂の
次が立圃子と六年成りてて類句の
雑を述ぶぬへりてちゆりけ
りちて帯もあはと陰ぬしぬと
らんあは塵つげりてちゆりけの
思ひやとせを成長をいふお乳の

心もたつるまきしせりや同惜少年春
千載不易の句をよきなりて物換す
たのれを評ふはあひしりや

十九番

兄

亀翁

病入を治り起し令衣りたよ

才

酒くらきき蒲團剥半りゝあのお

冬解百日を二百句より支吟せし時
あゝ對敵の即真之耐寒のころろ
わらわはあゝあると客と昔趣

廿番

うらま 侍れ

兄

赤右衛門

妻

啼まき入笑ひいりりほとさる

才

はもこそハ木免笑へ本やとさる

人情を假て笑へといふ作は女の
質ちなり此句ハをのうと待宵の名言
まねはひひまきし人口よあるおしはひ
類作のまねもななく一人一句よとすあり
侍るはうやあし〜えなう〜心のと
さうね〜近曾露穴といふ新し止
宿〜は月やみのおほつらあさそ
鶺鴒の習をまぬ神〜まぬ〜
ぬえな〜や此曉のほ〜あは
と云てぬ〜ま〜つる梢を見たりあ

これ物志の里肌よと舞うて雪雨の
の〜さ〜榎の本のう〜ま〜み〜け〜の
と舞りて〜目影をさ〜む〜さ〜海ぬを色く
の〜ま〜れ〜笑ひひあ〜ま〜時々のあ〜ま〜て〜飛
ち〜り〜けるを〜お〜う〜く〜思を〜れて〜笑ひ〜い〜ま
と云は〜れ〜あ〜とおのひ〜む〜侍り〜て〜か〜この〜
み〜し〜と〜私合〜り〜蜀の魂〜と〜ら〜て〜誠
なり〜す〜ら〜啼血〜と〜つ〜ら〜し〜こ〜を〜を〜り
ま〜そ〜む〜けて〜郭公笑あ〜と〜い〜る〜ハ私あ
あ〜へ〜ま〜り〜あ〜を〜と〜和歌のさ〜のた〜す〜け

少して舌の荒かちの細脛いキを大
長刀平うけてももよめるをねえ是等ハ
雑辨の二つよそく此毒子笑つて
えしと答しを真くけしうお句
第して兄弟の論ハ及ま

廿一番

兄

啓棠

つらあや牛とのまきて相撲取

弟

上手やと名も優美也まよひ取

句の裏へけりこれ句すまの乃

一手なる一牛との字よけて

廿二番 上手も立あふへや

兄

宗因

人けよけよや六月かやしたる

弟

幕下やとや六月あや

杜甫子了字血脈の格ありむ意味
ある字ありり句をくくその字付中
をあらるゆへは名付くその格より
しして句血脈の格をくく人けり
みよる懐感の老衰をたなへり
指あてしるやあさる母のさるあさ
およよせしおむ櫛のよまのつよ
初聲のしりしりしりしりしり
老とありぬる世を合て老然の
深思をさるひぬをさる新古の

羨ふあなへ一向は無潜の血脈神と
尸へくや
おのまのりなりとらふことの句中を
めりぬるやて同するしり
おのまのりなりとらふことの句中を
血脈流連すくや

廿三

兄

東頃

夏あしぬるやあさる母のさるあさ

弟

書す八月やちうとやぬーの心

七又三十年前の句やぬ俗うつまされ
とも古徳をちうとよりてあふち
句論中及守死のちもすまらざる
及なすり見せしめけ書のちうみや
かよ入て後の山平もつらぢい信
竹とりの翁ハ子をなげさくせあはれ
るハ親よわつ終てそふふあふの句

乃出すくーとふちうらまーは思ひの

亦乃追善ん

廿二番

兄

仙化

はくくと益圖の免やあきの月

才

つくくと聖のうまおやあつ終

こころのうまで決断せりあつこころ
あつこれと益圖の免を聖と

云字まゝそとを採居のゆよりも
宜しくそつる句は又免の鼻や冬も
可と云とつたふくまうしる人のさ海
みも成るをねもひをさる他を
おくたきをうしなふ興をとらん
とて曲流は落る句の出るよのち
そ作者よしく沈吟す

升又審

兄

僧路通

大佛うしろは花の盛か那

弟

大仏膝うらむらゝの雪

東叡山のお吟也池を左に
致景詞なき所をほと心付く
花の庭のお場やうや山守のちま
しく花を替もふめ掃あつて
と平梢の外まぢうらそ入おの

ひきもあは多るる

おのほりこたり

廿二日

兄

曦道

床を来とふ衣をよと衣や新鼓

分

伊勢の神にせぬは誠神なり

一と勢都よてあをを吹しぬ

ほらよとんとゆえー瓢箪の音か

ひて面白く汎ひけるを酒の肴ありと

口つきけるあはなり去来り

篇こそせまひてよみせん新しき

と中身しけるそのちけ句同し侍

志多しと衣やと云たりしこそ新ぬ

曉の思ひありー自句寒夜行の

信を起しての通り一枕の音声の

まて物に似たりむりめさしこれ

今めきしる白作りまふりすま

俳諧のひきこを唱へて邪路

あゝ句を求むる人の感をかゝり

廿七番

兄

越人

ちよ時乃心安きよ期缶子の志

か

ちう際ハ心もまのまにけのせ

尋常の句より中七字は凡俗
を立するハ荷分故人等々好む所の

手癖也是ハ別僧とらあやまゆ

一句のこころもくせなうも面白

風もよあまといと花のもろさよ

自然なうんう云うて兄を推スルハ

あゝ此花の念なくちうあまをう

むと君る所乃あまのもろく是ゆると

乃わらち也

廿八番

兄

玄札

泥坊の中をゆくや蓮葉者

分

泥坊濃霧さく水乃蓮の如

をすももの蓮葉笠をかつてゆく姿
乃みらるる目立ちるすの云はる古
来より蓮の字成りけり泥の濁
りる中は花こそいそおんと力を今
一句の詮を云立ちり古代の作者八句

のおもて地かさの近代を句のあり
をたしあむらりあきと心の元
ハツなまを泥坊とら五あまの考
ととも用らるるあまこそ古人の息吹
捨へるあま新田山よりけり白波の
み葉成折にならるらん方ハ口づき
や次一平懐袴とむきの藤掛よ
因え侍をいそおるる物を自由よ
句作せんと工業をけむ
泥坊や花の陰よりあま

あつめり白肌がうらあつめり

廿九番

兄

女 秋色

舟梁乃をぬいもろぬのちをいひ

舟

舟をいひ枕の露や国のみ

牛島とりあわたりは捨人ありきの

かゝて問て日くれて歸る時ちいさき人
舟よ乃る川く海のさびきよ月すまの
あつめり水の面もらあつめりおのつる
こゝ終りまゝあつめり海をいひと
りあつめり船の枕もとおつめりいよ
よりておみえをいひあつめりのかいし袖
をおひひやる心地いひあつめりおのつる
国の外や云えぬいひあつめりおのつる
あつめり枕のつねいひあつめりおのつる
そりしとあつめりいひあつめり

奇の筋糸

三十番

兄

春澄

草刈や牛より落ておこな

弟

牛よのる姫^{ヨメ}侍^コ落する女侍を

通船の馬を引えてはつ種の子の

名子とそくも京流布の二化ありと
ら字の所着をあれすや新古は論を
立ていそなふとあり京田舎の辨は
なりて也の名はかきそめよをぬれ
落るといふ字もかきつけたる人
是等ハ俳諧乃推^ス原^{モト}也

三十一番

兄

来山

おしめやよらぬぬのハあま

弟

うたやほむ顔ハ朝をのり

兄 うらハ田舎の子のまをねも
うみするおハちうぬあうり

弟 うらハもあをこめてとれ昔川や
竹田の子苗あうらよま

三十二巻

兄

此木栗

傘持ハ大根新ふ子日哉

弟

傘持をつくらハ到一菜摘外

屏風の陰をよま(姿) 姿のまを乃
登の子日の神を真うははく園え
ぬま傘持る丁乃^{ヨホロ}乃乃今更
継踏よま傘付ておくおひ今
おまの卵と是を都近きト野
なして大根葉も所は新ふ

やらの字まで面白く立のひゆる
川あ菜つむ大言人のうらまこも
ひもおふく枝の色やうゆらん
君の野遊の洒さぐける耳はく
をひ馴ていと奥あま下流のさうね
二十三年ぬ
そハち根なと宜し

兄

尺牘

須磨乃山句耳力あーかんころる

才

はるれ山ろしろよ何を詠能る

都難波のまぢを拵ひて以て石も
吟ひける日記よりん也侍も也無伴
獨相求伐木下くの幽景をとるて
ちうまうすうなる鳥の音其所よ遊よ
耳似より浦と云へき山とらへる其場
たのすしてはほくま字やこれの字
心をつけえ教句の馴熟ハあつてまも也
心所不尽有餘趣とすとハ中世も句

にまかなうと及ぶべき風情を起
浦よりハ申さるるもいつくしうも
何をととめこれと耳に中目より
流すの境自然を志る人

三十四番

兄

西鶴

鯛ハ都ハ見ぬ里もあまらふの月

弟

鯛ハむを江戸よ生れては月の月

花あま里より心よりて三千里の外乃
心平からむ一句のそ尾継類を中七字
力をかえて啓栄期々樂りあふさ
道を難波江戸生きて住よりのは
なき月をめでたの魚のあまらふは
初めて字景嘆時のおひ感今懐古
未二年字世乃月をえり鶴
と云む久らみあまらふは

三十五番

今ハ故人のやう成ぬ

兄

守白

本^ノ心^ノ一^ノ毒^ノ窮^ノ乃^レこ^ノこ^ノこ^ノ

中

なれりしこあめ鳥や蜀泥

短歌の短たよみは恨こてなくし歌よ
ゆる志のあこし帯よすうさしけ形
ハ郭公の子歌をみれば神も題一色か
賞物あきと縦横をわら侍るまハ

俳諧より葉一入るハはるる一おあ
乃物よあきし心もさるまもやけおあ
平一えゆるするや

郭公啼くあういそハ一蕉

あきまやあやねお音も何角

此神々俳諧よりおひい入るあを
是等の格法をほそせんハ縦横と混
雑一しりとも句は平そむへる
縦ハ川花鳥月雪柳桜のおり
あきて詩より連俳とも通角の本

題に横ハ不策也ハの是れ事
より初めて火燧餅つき燦拂鬼
うつ豆乃敷くたる能諧歌をさして
りあるをた 縦の題ハ古詩古事乃
本意をとり進まの式例を守りて
文章乃力をとり私の詞なく一句乃
所法をきつよけく横の題もハ
洒落ものも我思つるも我自由
云々大しひさしくハ論しは縦
そと心るておまを化あとり附るの

数句せしをぞあてはあある案
やうハ母を念く句をよ縦横をを
こめいづよおひより
人の師よなることハあは古人を師
とて 鏡子向ふ

三十九番

兄

室一

風まつらまのよ秋まうれに東外

弟

井の柳 まのあを 桐の一葉哉

風一葉の秋よりよびてまのあを限と
くくるまの色目平にぬらと一の地まは
つるうづゆるよまのあをの柳まを
さそひてちまの風の力をぬ日とまの
うらあり中七字のまを法句幽玄よ
おもひて乳合する五み字こまよ連
俳をわらちてい

風まらし まのあをの桐乃一葉哉

といふ西平連歌也自句其心哉
杆格して句面平かま

井の柳 まのあをの桐乃一葉哉

ゆすまを句の物もほろ福とをの
字を目あてりて兄弟の句まを分
つり一字乃妙ハ趣の微も含もあや
とや折々の景をとまがこ
てまはのなやすべて同

三十七番

兄

僧吟市

丸合羽を〜りぬ雪や不ニぬ山

卯

青漆を雪の裾神や丸合羽

古代平丸合羽雪打りぬ袖と
とらふ形より中七字ありたし
足さうり手をつめてる句形あるも
續腰の格ともいふや

三十八あ

兄

轍士

風の音は〜りの下り石を

卯

冷酒や〜り乃下弦石〜み

一句の涼味をらぬる人皆苦炎熱
我愛夏日長薰風自南來殿閣
生微涼東坡を百世の仰とて云
はや空平あつち地平をらぬ半時

絶くよ空暑のさぬらあつと思を
合てもも平起却せしりとなつて
笑ふよとひふせし入集の歌も
魔モクイを控て辛吟をささむる返書
し及びぬ夢も根あつて青抽あり
小室をとらまぬ他觀の人石上
詩を題して緑苔を拂をらふ
ゆのしみをさすもい

三十九番

兄

晋子

かろくわく猿の齒白く岑の月

中

芭蕉

塩鯛の歯草もきく魚の店

是りそあきの月とらふおよ山猿叫ニテ
山月落と作をなせる物すらき巴
峽の猿よよせそ岑の月とらふ
なると沾ホス衣ラ色と作し詩の余情

ともしふるや此句感心のよりよて塩
鯛の歯のひき出さるま冷しくや
おもひよせられん衰零の形よと
なりて老の果年のそれとも並
とぬつて五み字を魚の唇とて
ゆるよ活語のぬを忘るる其幽深
玄遠平達せる所解ハなそとて
ある人け句ハ猿の歯とせしよ
合せられしよハあはれ只かこりよ
侍る人海士の歯の白よハひるよ猫の

歯の冷しくてなると似て似ぬ思ひ
よりのおぬ句ハ成すよよとよよ
作を成りすめ侍るゆへ予々句先は
て師の句やと分其換骨を侍と
侍る師説もさのよとて聞え侍るゆへ
自評を用ひすて句法をよこの
後反轉して猫の歯白一歯の歯
いやあはれ侍るよもぬ句の二辨
猫くらん人ハ等す其の難ゆめく
あるなりて一句の骨をぬて甘ま

味を好むるは味見難とあり
皆をのほきの煉磨なれを鼓句
つら乃ぬよなるん人々を足す
のわらうをあるなり

句兄弟

章なきて俳諧乃るをれぬあり
物好奇なり雑談集なりより
此一局我れなり後述より句を
自由中よりほきりては道ハ親の
詞のこよかおしん古詩古奇經釈
ともなり縁子なる人おつき親の
やひく云とほりのその句ハ功あり
みともくえ一丁ハ鼓なりつみより
神をたあきうらみより鼓子あり

燦掃子笠も藪もうらつた山
 赤丸の酒をこぼさぬと
 佐を回しやうけをいせの海
 四つ乃鼓日月のおほり夜
 花の麻三寶加持の行ひぬ
 又大長を節の栗内
 うち見みゝ怒りけれと角螺カサガ
 控るもゆゑもあつたの日記
 山 崇 晋 山 崇 晋 山

詫觸ユトりやうらる烏帽子引のき
 夢くさくはまれば世の中
 子規己の十色も一色とて
 その母や子のあまのあや
 数珠切ぐ三悪なきのうら
 酔え序山乃高乃明の
 けす袖も手忘き多くの枝
 あり分髪と肩の鎧あげ
 山 崇 晋 山 崇 晋 山

月乃宿さうはと云ておの傍ハ 晋
木ぬ寄も在用お茶さう萩 崇
小舟このおなぐさこハ大系 山
心つらひと毎のそ〜お伯母 晋
木賊の力をさめおのく所化の時 崇
おみよるる此 魚上る 舟 山
やふ入乃おまこをあまは徳志を 晋
あこま〜と 春乃 酒盛 崇

癸酉八月廿九日乃昼亡父
葬送の場あり崩心の悲を
懐あそ〜四生の起あを〜 晋子
一袂年 蝶をさあおも 脱衣
とさふ母も 片神は病 疾
世の破筈あ〜つや 骨あん
如はま〜しるあは乃酒
穉念と思えぬ氣さう涌出
礼者の踏はみ〜る雪汁

糸初もきこたうくふる詠賀言
大名持乃畑はみあひ
兼世ぬる櫻の本立の雑司谷^カ
茶碗りやくちほのなま
山家てハ遊行も醫師をあされたる
今産筋中んし猿の子
の声 嵐まゝ古戦場
石地みあを雪袍を衣

草籟又製をくらねる谷のあ
點の同屋此井園して並
きほひある神雲流の人み人
あふを風や公家の編笠
七夕平揚枝をころも云とあ
仕似せぬ恋枝多そりまはる
花乃存り日るしとほる川
海苔ちかりく蒼翠切を嚙

二
目く死耳く死くられの者
みな是くぬ形域色あり
此鏡はくひのこく思ひ
世若くはくく邪正を眼差
立込て僧房多ふ中よ小紫垣
何よ追をく井へ落る翁
物すくまとの内所の男きこ
あきこみはく平伴の教

あつとつとあつとつとあつとつと
四度の仕着は根をやく心
鄙人を舅でゆとつとつと
齋のくをみみくき酔
風呂簾ししろよきと月夜体
紋乃ある好もいつまでれ杜
茅の根みちいさよ地のを付て
殺生石流るるあつとつと

東順傳

芭蕉稿

老人東順も梅氏よりその社又
江島聖田乃農士竹氏と稱ス梅氏
といふものも晋子母りて年よる
そのありしころ七十歳なりとせ
の秋乃月賦病る枕のうらみ詠め
花鳥の情あを悲しめ思ひ恨
その座北印よりまゝ神みまを
路よりしむの句を明らみして大
業妙典のうらみを隠るありり
時醫を學んで老乃産る本多

何某のやうり俸祿をばるる釜魚
甕塵乃愁すくしき世も世海
をいひひる谷の衣をやう杖を
折て業を捨つ既又六十歳のい
なり市店を山みくうなる樂む
とらるるをなす杖をさしぬる
十もせあまり其筆のすまゝ車
こわしうらみ遊よる生きて東林
終るもは是少大徳朝市の
人なるを

入舟乃詠を机北四隅に

行草躰 二十四句

悲悲鳴

晋子

ちんちんカヘルく 蝦カヘルくさる 涙のふ
 並ちぬ 鶴カウ乃 ねのののし
 春荷とハとの旅人つひつゝぬ
 おれーを 残汁と焼物
 と食めとせざるを志する者よの月
 ゆくゆくは 蘇乃ともな

氣ウちつぎく小原濁る 秋の昏
 世日つ来るを 家色乃 顔
 我意と人の内儀を ちめを
 湯豆腐乃 湯のさめつ 残かよ
 糸柳冬の寐を ちめを
 伏見乃 酔師を ちめを
 炎昔くぬ 風土記のなつ
 芋まて 地る 城中乃 畑

引高千引板と一高の叫小猿
温泉入の海に山るる月
むの扁ひつと酒市を拍たり
名 善タウのしちきるかしし菜の味
其の白飯十里ハありくモトイ喰こす
を歩の藪のせそよ州店
手たらしも桶の餅を入て至
孫をひたびり息負ぬ祖母

東國ハつ板泊りもなまきけあり
松のちまき一紙をぬる月
吹出まハ床もういふ笛の音
いとひやくは 瓶陶乃酒
病中をも乳母の尻をかきとり
寝の下梅平何を入ん
在所てもよほくはあり泊津の鐘
市母のともハ出茶をこけり

あきまゝの車の輪く牛の舌
切を突きて黠取付
花畑ええも枯く面を歩ぬ
傘少りてゑもむ 春ぬ

五月廿八日

海芽ッ原キアアヒテ

晴乃うま

霧をみるよ

晋子

ゆきもちや 蜜ちいさな料の系

松乃百枝ぬけて涼よ 柴栗

荷のほろひもりつ 眞ふき 介我

ニツあませて 蛇とどめる 晋

あけく刀の多お月能宿 系

夜長さによふ 旅の舞く 我

らふの菊中なほける 娘の子 晋

包とをとけえ 饅頭乃箔 系

神まつてて狐佛事と乞儀し我
和田恩智等々知りありん
炭賣のけしむる初ナメを劔ナメめて京
毛をもむしほおを活イナかへ雉我
と物も篋又百々の菜ハつたりし
おきててさしる花の海原京
茶箱初よめせて恥しよ家
アを女房あつて唐紙 晋

神の月十年あはれもて
片名悉く鯛をひき茶紙打我
以比乃鶉名つて茶の湯も
店流の尼乃あめはつて京
我るゝ位りて御し小船我
菰ツホくわりのわら鳴愛 晋
黄鷹ツホ此鳥よあつて松より 京
匹巾ツホ燃し酔さ梅あん 我

結成の恥うち形し明後る 晋
車新ぬいて嘯す材木 糸
白雲坂の裾をゆきぬ下谷乃 我
占ひせとも神子の宿札 晋
結指な五雲く草ヒトエもりけて壺 糸
おほとあつらふ志ある吹笛 糸
旬草の露もゆるはくく 晋
とちぬもくそ茶味こちと 糸

ものらふて酒の心脈ハ飛鳥川 糸
世る能景くしなりし我山 晋
計カキ鉄くむを殺さる花あるは 我
あは紙紙をく月の鶯 糸

六月八日 慶燕

闇指

背敷子子微とるもの物うけは

散くく居て遠く灯を垂音子

糸様邪子成まてりよらん山蜂

蝶のゆく染を酔て押こ指

苔の月廐乃額のおわりの音

清照水とそわくぬきん附

川の氣味をなせ悲作ぬ北山指

河邊此音乃豆こ竹ゆる音

日のさせと蠅のへちる冬夜爰附

親乃我子くもやちる顔指

水氷をうめとくとありあ音

基合れ指をみ付て是附

一節を加賀商人の聲ありし指

やりての下まや宵のるは月音

面瘡の種もあきハツリハ
すまのあ乃口帯てしとある
濱焼の目成り守るはの意
貴たの白形うたさきある
名
まろハハみひ手習はそをれん
はる張ゆー半井の門
孝りを乞食中く志しきり
小簾張砂平斗る塩時指

送くせて送つ見之以下
四月の胎といふあつたれさ
燥掃やかりしをうん神のる
小海は多うた標の鑿口
所せきく階あをりけて踊見
モトイ
終ちある月白の
梨葡萄はのまきこなよ水肴
扇乃下ありる
蚰ケシ蚕
晋

なごころもくしこほされも老の骨指
彼等のつまは白山の温泉峰
静ある猿の鼻のやぎしとて晋
脱してるあふ蓑の松明指
大枝もむ盗人もあみ多子
巢よりくまうとある或の子 晋

壬申十二月廿日 即真

芭蕉

赤らりてむ入探進んめつをよ
隙こむすくろをつ吉信君 彫棠
目あしあはまうをを引くを 晋子
お紙のよはみりを鑑小 黄山
夕月のたふさげしかんあ厚 桃隣
出代して秋そせりし 银杏

岡^{アミ}々成まぬハハる榎の香棠
肩^カ中^{ナカ}チ^チな^ナ小^コ智^チ居^イ手^テ親^{シン}音^{オン}
足^タも^モこ^コよ^ヨ菜^{サイ}種^{シュ}を^ヲお^シて^テ苺^{イチ}の^ノむ^ム杏^{コウ}
茶^{チャ}紙^シ煮^ニて^テ也^ヤ以^イ治^チ療^{リョウ}如^ニ芋^ゴ寮^{リョウ}蕉^{キョウ}
下^カ張^{シヤウ}の^ノみ^ミ故^コ凡^{ボウ}む^ムく^クあ^アつ^ツし^シ山^{サン}
つ^ツの^ノい^イ猫^{ネコ}乃^ノ身^ミを^ヲひ^ヒと^トあ^ア来^{ライ}ん^ン隣^{リン}
む^ムつ^ツう^ウ也^ヤ襟^{キン}め^メさ^サし^シ世^セ嬾^{マン}の^ノ魚^{イサ}棠^{テイ}
硯^{イン}法^{ホウ}な^ナと^トこ^コい^イや^ヤせ^セう^ウ何^{ナニ}晋^{シン}

糸^{イト}の^ノぬ^ヌ窓^{マダラ}の^ノう^ウこ^コめ^メあ^アは^ハん^ン蕉^{キョウ}
こ^コす^スの^ノみ^ミを^ヲ志^シし^シむ^ム唇^{シブ}陔^ゲ
ま^マ一^{イツ}と^ト嘆^{タン}を^ヲも^モん^ン鈴^{スズ}の^ノ舟^{フネ}晋^{シン}
ら^ラん^ンと^トい^イは^ハさ^サく^ク遠^{トウ}^{ガカシ}疫^{エキ}棠^{テイ}
愚^グなる^ル和^ワ当^{トウ}も^モあ^アを^ヲ秋^{アキ}の^ノ后^ゴ杏^{コウ}
言^{コト}み^ミあ^アめ^メを^ヲお^シる^ル箱^{ハコ}々^々梅^{ウメ}山^{サン}
山^{サン}々^々れ^レり^リと^トい^イは^ハさ^サく^ク志^シつ^ツし^シ蕉^{キョウ}
福^{フク}あり^リと^トい^イは^ハれ^レ合^ガ歡^{カン}の^ノ下^カ圖^ト晋^{シン}

みむらゝも 携つる 床のいも 山
思を舟子 昼乃及 休杏
気さまへ 曹洞宗の 冥り 陵
焦ひ 夢さく いくも 焼 棠
及ぬ ありの 主く 恋を ち 徳 晉
すさ じふ かん くら 次 傘 蕉
移し じふ 星ハ 皎け け てる 月 棠
雁 雁 雁 雁 雁 雁 雁 雁 雁 雁

松茸を 近江 海り 八 沢山 晋
そくさい なみ 下く ちを 杏
老い 休ハ 海 蕉より 介 休 たり 蕉
むね 名あり ところ 楊貴妃 棠
付 休 ちを 中て ちを ちを 挑乃 色 山
こころ の 乾乃 誇く 三 絃 隣

六月廿四日真り

結^フ庵^ラ河^リ邊^ニ

吟

舟人の裸^レ笠^ヤ北^ノ峯

柳^ノ枝^ハ川^ヲを^カぬ^ル蟬^ノ音^子

百草の屑^ヤ花^ヲか^キる^人治^徳

柄^ヲ大^クす^る月^ノ夜^ハ吟

碓^子の肩^ヲを^カる^人教^入る^音

金^具を^カる^人次^濱縁^邊

物^ノを^カる^人家^ノの^風吟

白^紙の^二の^け乃^蓋音

冬^枯も^折ぬ^愛岩^青松^寺吟

星^おり^海の^雷吟

急^ぎる^まの^襟ぐ^お吟

見^て投^入の^切音

赤^いの^川音

赤^いの^お摸^あこ^か吟

下み元三のこねくは家老く
志くひろをぬく世急り雪目吹
食のなき志賀の山越月も雪
ま日をもりける芝のあり光
雉禰らふ葉先の楯く鳴鳥
鞆箱ひらつ尺込るこ
近つき六乳母をうりなる傀儡師
お基子くくはな乃持殿
晋 唐 晋 唐 晋 唐 晋 唐

焼く木村垣の便中痛くき
荷をもとくれぬ荒出る舟
僧を皆耳を寒く赤山下屋
粉河の鞆タカラ系をあるこ
懐くもく卯乃目利笑めん
酔くも力のつとき所珠
あひらんと階子拭く月の影
ほくきりこのも糸をたか
唐 晋 唐 晋 唐 晋 唐 晋 唐

帷子^{ハナケ}なりやもさゆる秋の音
来^{ハナケ}る餞もこれ同しよの
初鯉をよまてハ買氣し
世^{ハナケ}なりとさるる木置場の歌
阿のやうな女子成て花の陰
山吹おほり三人の恋
晋

三子草一菴をさそれくる日
おもさぬ雨と一花とさるる

湖月

雨乃脚日半^{ハシタ}なれやなな
手桶の蓋とつねの 荷 素牙
寂椿^{イナ}と八重の木槿をさるるひて紫紅
秋さるる京昆布の色 晋子
叔摺^{ツハ}もつあし女ありし月乃庭 久
棹^{ツハ}乃 石北落海裏の夜 月

此錢を拵し心をおそふよ
焼ヶ山越をも身をも白色
下築りの菜をりく漏り月
押すもなるも恋のある顔
一時の揚るの勝も志つる
股立とあく紙をくひさく
中橋といひしおをを鈴の森
き方此白ひや茶あをい
酒月

新の衣も枕もつきて人を踏
鳴乃目くくよ星の月影
鯉ふる籬の依れ苑柳
芝生をすすむ小坊屋の杏
春^名あや後り碁石のくもは
下着をとくを百あ乃脱
市切のみのもき紙飛てよ
をくあく醒て誤り面
月 晋 紅 月 晋 紅 月 晋 紅

はあくと追後舟乃楽いとよ
一向宗乃 南无阿弥陀佛 晋
借素袍ふあやお姿平て
徳後寺免の標りく門 月
切飛治とめよ中すもる 郭り 晋
標子をみきと書帯此流後 知
十八がすまのあよをぬくむと 月
木曾木つるゆる月の川音 行

百姓の位といふあまの秋 晋
お行次身の人乃世中 紅

あこれこれと宿りそおと
あなまといふは廿二句
あなまといふは廿二句

免れを聖天町やーのみん
諱強矯よくそ幕を過るに
月雪は寸切りを中は寮は若
園栗りきく遊山絶り
二之俵川抜きまののめお
るそくゆきて迎に盗人
大寺の川幅らゆる向ふ風
一小を焚^{クイ}て仕まふ松方
音

此系神よくハ見とく深し音
めれと用をた骨をとりむに家
志もやういふさうりか綸子好
栄垣らるも老の酔い狂
そらうやわ替^{カハセ}との子大晴日象
とめはをきぬらひもよるお
取や湯女は法をいあはれに
狂詩の辨り推人の月雪

あは音瓢覃の履かゝるり音
田の鹿の鹿ハあまきこくつト我
心敬の衣活きくもぬきり雪
赤紫の芥は寒は是もる 叔
下市乃とぬり蹴立るも盛然
豹の糸袴の鈴の玉風音

あは音瓢覃の履かゝるり音
田の鹿の鹿ハあまきこくつト我
心敬の衣活きくもぬきり雪
赤紫の芥は寒は是もる 叔
下市乃とぬり蹴立るも盛然
豹の糸袴の鈴の玉風音

うしろしとみのかみか
こころしとみのかみか

寒玉

油鯉ハ隠居もあまきこくつ
猿之の鹿もあまきこくつ 桂花
四ツきと月よも船を呼ぶせし 紫衣
物のもまりもあまきこくつ 秋色
笹の葉の眠るもあまきこくつ 晋子
叩者なる基ほもあまきこくつ 玉

多岐あそびの酒のる花
彩裁メチにくし日うつり乃紅モミ晋
四十より髪につやあよ玉梳首色
海あつりふハ爵と志やま紅
ころりと水櫃ハ舌子清みり晋
空偈をくそあつり系舞花
亦積を物く志くはる他格玉
尾地も浮勢も十分の作晋

山柿乃門よあそはん々乃月色
音めきつく一糸の草指玉
お好をのくあそよ包く尾花
四糸て買つけあ乃杖色
彼岸中やハ泪の舞サユト音
概り笑のあそぬサユトあ
米掬の古くをくこひもあ色
歳余あそんぬをほりる花

跡縁紀し

甲戌仲秋

木母さよふ乃今ありあの月か晋子
之月のも一本の月風光つるを
けとも交りてしるる一と名をさよ
諸る樹ありをらんいや暁我乃法
論くともありて廣沃をねとてりく
心定めりて遠よあひをけりて出
る日紙いとよげりて思乃かの月

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 木母 and 乃今.

雨平旅りをはえりて今さき
力をたもつてなしく一板の道遙を
あつたけつるあり

九月六日とありて江をさるる船中これ
りね送りやまぬ綾柳の吹あり

そ途をみまき千秋の秋のせ 岩翁
幾人乃送りていさむ初み紫亀翁
六郎のわりりて

草まきし稻干縄の——つら 横儿

箱根峠あり

杉の上よりふるそみえある村松 晋子
秋の空尾上の杉をまきあせりて
いさむ初み紫亀翁

三鴻ありて旅りの重陽哉

門酒やふるをのりおの菊を折る晋子
朝彩やかゝる礼するさきの酒 岩翁
まきしゆや畠中乃少あまき 尺草
ふる綱平折のまきしや旅屋飛 亀翁

原回頭

新雪や 空を巻き 雲をさす 雲子
つゆ土を常 雪を面や 秋乃色 赤き
不考や 豈赤蜻蛉のやも 空 横儿

清見

あらしよ乃塩や 空をさす 萩の色 岩を
ほろの 霞の 霞も 柿の 空をさす 尺草
あつた

雲子をよみ 空をさす 雲子 尺中

うつの山

神の 空をさす 雲子 尺中
少の 神の 襦を 空をさす 雲子 尺中
所所 柿を 空をさす 雲子 尺中
うつの 山 空をさす 雲子 尺中

佐良中山

系鞋を 推を 空をさす 雲子 尺中
赤松を 空をさす 雲子 尺中

及後よみ奈奈をくこ小菰の山 晉子

十二日うけ河より秋奈山へ入

森ヨリ之くく 犬居 秋奈

神すりや息杖てきる松の葛 松翁

あこくくした麻追ふ山奈よ蟻んき取

蛛の巣く呉柿くる山奈の奈 尺中

合羽着る麻く吹くるや秋奈及晋子

四十八瀬とらふらぬのこころは

わきくてもいふく八十余瀬と

八中

瀬乃敷やあの谷は谷の鳥あはる 尺州

せききいや垢離場へたる岩傳 摺儿

秋奈禪定下山の所

本くはあいのく所「秋乃」上包く牛取

かく多く杖を投するあつて晋子

空名川よりを龍へ下る

山風やあまはくくんあ川 岩翁

糸鏡渦巻くくやあくく糸 横儿

大い切所といふあくく山高

鳥不巢か水清魚不住

あこのかや取ものいぬ七ッ釜松屋

二役川 推河脇の市社か切所か

赤擢か一籠ほほり測の色 晋子

測かや測かはほり赤ほり湊立 十屋

か—ま舟かはつくまか

我等かや勝かさせさるあ時か 尺草

十からか 濱松か

内玄関家かのめかやかとか取かまか

のちれ月急かをかるかんか宿かとか松か屋

十かとか出かるか乃か珍かやか弁かのか者か 岩翁

好か乃かこか味か方かうか原かをか一か目かうかな 尺中

いかつかもかちかをかあからか

好かのか月か札かやかさかれか江か之かのか屋 晋子

熱田奉幣

芭蕉かるか甲か子かのか終かりかくか社か大か一か

破かきか築か地かをかこかあかきかあからかいかふか

うかこか子か繩かをかけかりかくか小か社かのか終かと

ある一なる石をすくくその結と
あるよのふふきのよのちのち生
きるそ目もいおらうもはらう
とくもく興廢時あり甲戌の
かゝ造業あつたよめし
文くも秘室の舞や杉の月音子
るものひあつていふと月ま
まおのよの帯ありはむれ月岩翁
津島よは天王

縁乃輪除五ふとのも守りうま
十六日くらあう
け魚をうの佛前いせろも
大魚乃くくはるも極外尺中
かきもや蛤くも丸朝の酒
はの泊を
伊勢乃や往來の思はう松翁
世の秋や女の膝を伊せう
いせあみ秋の白きぬ氣茂童尺中

き津川より

むらさき祭主の輿を返りより 晉子

ふ宮 近くおまわると

日と夜と古殿と亭の後外 同

新葉乃 春法めより 岸白石 岩翁

まゝるるの秋や 穂をつむ子等 館 尺中

唇の色と寒し 宮のしと 亀翁

能^キ時や 御供いゝくく 松翁

内宮 浮念の属をくく心へり

きる五十鈴川より 遙くおねス

月の秋や 赤子いする 秋山 晉子

おいする 秋のねねや 杉乃 札 横儿

廿日 於福井 兵衛大夫 御師家

御神樂 謹上再拜

神の秋七午より 晋子 岩翁

四子此家 秋氣ハなり 晋子 亀翁

秋あり 晋子の是より 晋子の色 天中

柳葉のあきかきや 山より 横儿

烏帽子ある秋の畑や少少つと
たろや小判なつくく菊のむ
晋子

廿一日 二見 秋意

赤朽を履ん以垢離々齒の菜 岩取
ひやうにひく次乃や石と岩 晋子
岩の上く種ゆき一花為 晋子
汐らうや苔の力を于以 芋 畠 横儿
秋れや皮を浴さゆ一花と 松取
葎の子や 游シヨキまけり 芳の梅 尺中

佛師の赤子あゝいりつく

濱萩ゆり 足さきもん 碎ん 岩取
み葉し 秋意の 柘と云れり 晋子
真志まぬ 畑の 作や 落葉の色 晋子
は切やみ葉つとてあさあ山 横儿
宮河の上の 酒送り せしる

色りえぬ 杏と柳のころり 岩翁
は花をさくまていこいせ

根を石とく 是ら河原の 牡丹は 亀取

ききおるや 花あふむ時の母菊は 晋子
角石を拾ひのじせ 野菊は 尺艸
廿三日伊勢ヨリ長谷路へ出ひ田丸ヨリ
橋物とてまゝ山嶮坦々越ス風京時
とてさうつりつるを奇絶の地と
山畑の草ほるあまの伏夜は 晋子
法柿のいつき枝の伝わらな 晋子
焼あやや灰吹つる山下 尺中
こなり一をくみえ等室に稲莖 横ん

りけつらひ小室あし新たをこ 晋子
おとれく糖く畑のくあつら 岩翁
川芋のまじり流るや谷のあ 晋子
一心をさあつらつるか 晋子
莫嗔野店無肴枝薄酒堪結
豆莢肥とて同南窓り句ヲ感ん
足あつる亭もさきげを新酒は 晋子
るまのめく火を振るる秋の葉 尺中
山つふふ日の出の虹や川板の經 龜翁

初瀬之輪 在原寺

抱みるよ家の子逢うとつせ山 晋子
つりの杉や根をうり葛乃色 千原
をせ籠り世の終やこり酒 横儿
けみ柴井みけりも谷の繪巻 尺中

大和柿

治ぬめく柿の志あさを思ひたり 晋子
みみあつ初瀬の下もろはのむ 松翁
時をわきて真後

日の月みのあ帳もくはねみ 晋子

光の皇后の大ゆや金

虫乃のや芽ふふく次風兵の巻 千原
大佛の赤肌の巻や日のめりり 尺中

廿八日南都を出る

り秋を十三鐘をく けりきり 岩翁
常とる真院のふりて

小鳥のつせ人をみる 山居み 晋子
中野は美宝什物さあけり中野

小松敬法上人のあつせらむ
松陰の硯あり箱の上より蹄と
年々増えるを盃より硯の形
ひつあやし細るゆゑ也

松陰の硯を息をうへて
二とや志きみしげ 薦のあき

多武峯

下り坂も 秋を峠の本は
長月や 樸とあるる水車 尺艸

案内を女あやとらうと輪乃月 岩翁
ひししと秋之端の近たるる 晋子
下るれをみとらや 松の月 松翁
秋の日のあもるも 秋とら 栄 尺草
秋のよるも 秋の神や 苔の色 寸草
のしはらう月や 井筒の松丸を 横儿
僧のキスあつらふ向あ 尺草 晋子
春日四所のみ人連 秋あつらふ
あつ成の刻をたれと 尺草

介幾日秋の秋柱をあら山 晉子
日ら山とあ子の灯籠秋の色 岩翁
御供針の猿も菓を運ぶり 晋
心して陰あむるや赤繩棟 横儿
侍勢を非る向ふとやんを

おみ石乃やまのまこと志の層 晋
木の根を竹や小麻の角の隙 松前
二月堂の七日函食たり者ある
毎は川口して晋人声

増賀盤乃古詠よそ

づぶねまの控ぬ身をしほくれば 横儿
廿九日より乃山あまの白雪岑よ
凍り煙る谷をうんて山嶽の赤
ほくちちひくく西平あを伐ん
音あまのひお院ののひの芭心
の底をくくもふ寒き錆磐石と
いふ白くかりひとせ
き丸の城の寒きとよの心 晋子

日清りやせあそもみのすれ山千尋
あそねや柄くを日くせすて横几
ちの海や苔はえ白ぶみろ極 岩翁
かありより一燈乃真よ時ゆ尺中
世さきこみしすすわく風と
よのねの所とありか
月なるとあとおとせき
彩ぬの月見所や 九月を 晋子
西河のいまみく
三尺の力をうど かのくこ同

あつねや河を月あそねや 晋子
十月二日さおん上世あそねの宗こ
小六月さおの池や 晋子 岩翁
あそねの獨り寒く 晋子 尺州
院さそあそねの 晋子 龜翁
つゆあそあそねの 晋子
あそね樂年く 晋子 女人堂 同
廿年けいふみや 晋子 横几
卯塔の多あや 晋子 晋子

雪の後の宿をて

たをめて 措く 壺を敷く 尺艸

紀の川 いづれもあり

多つ弓矢をつく 舟やみづの月 晋子

船の影をたしめ 舟をみ 舟

和歌の 吹上

舟をこし 舟の末 磯をみ 岩翁

かみ 舟をみ 舟をみ 舟をみ 横儿

浦の波 紀を舟 舟をみ 舟をみ 尺艸

かいつく 舟をみ 舟をみ 舟をみ 舟をみ

舟をみ 舟をみ

舟をみ 舟をみ 舟をみ 舟をみ 舟をみ

舟をみ

舟をみ 舟をみ 舟をみ 舟をみ 舟をみ 同

舟をみ

舟をみ 舟をみ 舟をみ 舟をみ 舟をみ

舟をみ 舟をみ 舟をみ 舟をみ 舟をみ

舟をみ 舟をみ 舟をみ 舟をみ 舟をみ

る夫如雲のよの従者なり
つあゝ力を信くともみけるよ

鮎ひつとく魚のこも網のふ 音子

あの方のふたれ魚あすも

ふとらよ小鯛つとく 網子のあ 龜翁

網をせそ鮎くああをともせり 松翁

網形くあけのの浦や 弾のあ 横儿

つとあも寒く かつ井の張る色 岩翁

網をふそ 信あも くら 磯翁 尺艸

住吉奉納

昆布くまのふを掛 雲のあ 岩翁

し女子の火祓をせ 神樂の 龜翁

木くし 下 給馬子みの帆 横儿

お徳やああむ 尺艸

芦の葉を あより 流るやあ の海 音子

十月十一日 芭蕉翁 誰居 逗る

のより 誰のあそく 誰

旅も子なるあそく 誰

此一帖者龜翁旅泊之日記也
初而有遠遊之志故重父子之
修合朋友之親共祝邪神社
等敬祀佛國而名境務藥所
性所至之幽懷處不巧立京洛
歡遊之間多取酌之暇令
校合吟了則号隨緣記以而
以負句兄弟集後 晋子

句兄弟追考六拾

○健句

誰肩々牡丹の旅や初〜〜色 曲翠
新々々新あ〜〜色 柴栗
五月雨石部の山々 凡あ〜〜色 松風
下〜〜のあ〜〜色 暮子
地〜〜のあ〜〜色 隣一 枝一
繁〜〜のあ〜〜色 山蜂
一町炎あ〜〜色 難 黄山

わのそくろふまよふげある 茄^{ころ}子 為有
痛く涼めはらふ川邊の人 画 思演
傘^りして涼くまわ 雪 礫 孤子
精をさらけぬひらきと 山さき 巴水
あひら^り 六条との橋 牡丹 許六
油 鯉 和 沖の釣場 ち二百尋 園指
けい^白まご 餅の海より 転^りご
満^りさあぬるまは 是のちと 雀^ん 山 蜂
あひやまの^りあ^りころ^りの系 杜若

曇^り保ののち^りけき^り五月^る 野梅
あ^りま^りお^り大^はの車^の園^のさ^え 介我
ほ^りり^り目^をあ^りみ^ぬあ^り糸^系 岸口
雨^をあ^りあ^りあ^りあ^りあ^りあ^り 揺^りの
う^りあ^りあ^りあ^りあ^りあ^り 桧^新 埴^吟
あ^りあ^りあ^りあ^りあ^りあ^り 山子
あ^りの^りあ^りあ^りあ^りあ^りあ^り 桃^都
あ^りあ^りあ^りあ^りあ^りあ^り 嵐^水
あ^りあ^りあ^りあ^りあ^りあ^り 素^牙

除ふのこ成ても娘一益志は朝三
あまんとこのあまはるり二番尻湖月

春の国月を

はみさねるも 毎月めを田原芳山
葉うめの白をすくの世を鳥介我
夕立や ちもなをふくの朧まくり 雪吟
はめを蝶を食ふ下たをふるり 芝蔴
寒菊の肉をうめよ 雛子ひ 湖風
蕙門や 終るるけし 山ささる 琴風

○新句

老尼

きふふきの思ひねも光るふ松吟
あまねるも白もみねまに火より虫 紫袖
あまのねり 神もはるの白み 秋色
乾癡治もまを我を合のまを思演
市をまきあうつるるそ 郭公 安之
垣ひもくあまのこを紅毛の西を尼 幡羅
七夜の花のまを子縮乃を 智月
るはこ子蚕あす 葎のあつさみ 許六

みのるさ 咲てもゆきさほのむ 紫お
あさのころりり涼や 刺 萩草
雪のんぬさあさなけ 山姥の宿 徹士
うねねや ひとし何あてりまこ 彫棠
掛物や 舟船はほり 梅の 梅葉

さひらりる

さあさとうさあさいさや 衣單 ヒトエモノ 拙山

水産あり

御所と成にけららるの都云 野梅

此次ら次ららるおりの玉火小 神叔
舟急く小松なるしりさおとら 一雀
帯ねる千川も流れて改干以 沾徳
寒さるやあつぬを隣より 暮子
舟との部も氣は限なきあつら 桂花
灯の志あつぬを窓の香 氷花
りささおの橋も滅の物渡舟 百里
るれをさるもさるる寒さる 柳玉
ちるもやあつぬをみもぬらさる 東水

蓮のよみや田を仕付るるあの子 沾徳
うつくしあのをしきさるる楚以 神故

晋子そ月のたのしみや 旅の
さうりやゆきくおんや 送りぬ
名月を素心と二里もなき 歌也 周指

幻燈屋のくろや

石山さ栲の仕あやめさう酒 曲翠
あふ人は押やれりり並火燧 百里
あふぬ鮎々給の和加城 肅山
あふや一あまを女房の舟便 みる

○清句

雨蛙芭蕉よのりくくまのきりり 晋子
やあふの扇やむのこをくも 皤羅
あふりみくつるや紅粉のきり物 此君
文を嵐蘇のそあふる小梅也 秋色
あふ魔忘子をさるく菊の蘇人 梅葉
灌佛やけし並あふ井底を根 曲翠
あふ女や子のあふくく人枯さゆく 棄捨
あふりの緋くさあふる磯くま 尚白

肩衣平巾のなるをを最袴 山川
いゝゝや喜ぬの流れはくは月
捨まは木石の堺乃をさるを 許六
縮うゝ何くうゝんまをを 含棘
夕のやけり湯とのと 石角上
石乃石やわんのも平紙 介我
泥つゝぬ流るありり袖はく 沾徳
衣を竹のさるるる星祀り 酉花
筆やわりの竹乃好もく 氷花

○偉句

織まゝくちゝとや醫師の紋所 行露
奇塚を石のてと切すほゝる外 银杏
あし女のもてちくまのと川の文 彫棠

新集山

肩裾くまを安の幾や山櫻 穹風
せらるも親の顔んと年北昏 思演
前あしや獨つたまゝ 花乃酒 木奴
新梅の志るも青おるる 酉花

人心のまじりけり 多し 瓜畑 園指
星ありや 離宮の中を 徒て 山蜂
り 灯と 煙を さらさ ぬら 暮子
まを 船と しく 舟も ぬれ 中 秋色
ひつと ともりよの 氣を ぬき 思 演
一と とも 蛭の 血ぬら 子 苗 子
まを せも ころり ぬら 敷の 髪 松吟
難おし 世 活も 暑き 此 夕 葛 糸
葉の 下 みる ぬら ぬら 素 瓜 夕 秋

山さくら 山椒 くら くら 火 煙 小 角上
人 近 下 樺の ぬら 村の ぬら 介我
まを ぬら や ぬら 伊 吹の 風 ぬら 午那
遠 ぬら ぬら ぬら ぬら 夕 色 翠袖
ゆら ぬら の ぬら ぬら ぬら 堤 亭
約 主 葉の ぬら ぬら や ぬら ぬら ぬら 月 去来

猿所を

鯉 淵も ぬら ぬら ぬら ぬら 城の 陰 正秀

○麗句

文をなく 空をまじり 糝五把 嵐雪
我が乃 蛇の影をうつる 孫子
彼をまじり はん様のちりなり 彫棠
里をまじり 火弁袋をまじり 安之
散をまじり 根のせきをけあつて 晨鐘
曉をまじり 根をふかせる 毒もふ 秋色
蓼貫よ 使はやくして ませり 黄山
川はやくもくく 舟の如 皤羅

山はくく 少舟へ 海をのり 模様 野風
なをくく くら 權のちり 笠の内 控ひ
植あまふ 子苗よ 菊田の思ふ 一雀
まの舟や 木尻を 蓮の皮合せ 沾徳
茶の毛を 老ち 二をくく 立隠 彫棠
石川や 築く 時の 鶯濁り 桃鄰
涼み 舟の 未そ 燕を 紫衣
白魚や 舟を 細き 拙ひ
鶯も 星の こちり 素衣

石竹の程やうるほありの月 牡丹
草花と人あせたり蔓くさう 山川
細川の流を蟹とも秋の雨 一雀
ゆするあを好まや猿よ鳥つ了 彫棠
花のまを見するわく入也 踊 思演
名月みねたりや柿の刻を所と 角上
縁入 赤糸も 白牡丹 柳玉
蓮のまや衣裳みあや 虎琴
藤の家の中 藤のまよ月あり 未陌

富士の山と鯉あつて及者うふ 松吟
鯉もあつて川の水といひくわたり
日比ある門をとりあふ念佛 介我

病中吟

も髪や海へくさるよ魂速 山川
古木立海へくさるや鈴の森 拙山
海苔房やわさる魚はあま 柳梅
名くさあのか見る西風より 一江
川鼓や蚤よりわく 横田川 彫棠

涼く水鏡と舟をせぬ子さよふ 野風
角巻て、生の上はひのやあやま 一境
うつく日を襟よふふの園うな 思演
姫所也 物ありひあふ粧ひ 露 節水
あらさるやと島をぬる山つま 野梅

羈中

好屋あつとあつとをのこる女外 拙山
舟經と先小をつなくせり 戸牧
みささちと畔たふさく刈種 杉風

豪句

六月の山家千を並あしし山 芭蕉
むじしと通干川の船乃令うま 湖夕
卯のもよ芦毛乃言此 許六
山鳥の尾子んくすやあまの表 曲翠
あのみりりるんくすや柳うれ 野梅
すーはら 笋鮎のふり 湖風
母の墓よあつて

家新やとれと眠く荷のあ 秋色

初ね好夜の鐘つよむにふるま
一節の乳の毛下し命あまみ 湖風
明かぬや井筒の雪あ神のあと 其詞
あを蹴り菊の伽ふる白うな 口遊
ひるらんや 暑い盛り花乃後 含棘
二十のおろねととや 鯉舟 徹士
氣をふるはせんひとくし山さく 寒玉
わし舟 舟賃なりとい涼くたり 白盆
夜所の水をあきくし 旅の表 彫棠

老人の襟のうらや 堀涼く 神叔
門をさかきをぬすふとら 鯉 泥足
かくらの目やこそあまよこの月 雪吟
歩るさあはみくるあしりか 介我
貝ろうを風のうららんを木立 彫棠
應くともと 敵くや雪の門 去来

人をのつく得るれ可きあるひの雲を
凌ぎ水よのそとあるひの眼前に流し
幽妙を探る志の等——かきされを
向ふとふく是をらんゆあぬユなる
を此は足下はけしる玉張拾を思ひ
心を穿ち海へ入る又ま中へりむ
ろを守るとれまよのハ安く目よつん次
程求めん此を備へ拾いする人よ

極度の驚きと云ふか驚かす
[?]の驚きと云ふか驚かす
[?]の驚きと云ふか驚かす
[?]の驚きと云ふか驚かす

仍^キ當^ル事^ト一^ニ是^レに原詩本款乃要
をんせそく背を諷ひていさ^ニ彷彿^ト
子^ニあ^ニ一^ニ度^ニ花^トといふを彷彿^ト子^ニ色^ト
一^ニ葉^ニ花^トといひ^ニ一^ニ人^ト曾^レ句^中の^一余^レ居^ル者^ト一^ニ
地^ニ誰^レと^一一^ニ人^ト曾^レ句^中の^一余^レ居^ル者^ト一^ニ
場^ノい^レん^ノの^一愛^レお^レる^一一^ニ又^レい^レん^ノ又^レ
ふ^まに^レ行^やこ^ろを^レあ^らわ^せる^事さ^らり^けり

志^ヲあ^ラす^ノ浦^ノあ^らと^よめ^らに^レ志^ヲあ^らす^ノう^らも^も
遠^クは^らり^のは^らは^らる^よ架^張く^出る^事の^一
月^ノや^も陸^ノの^一よ^もん^と皆^是分^解詞^ト
状^ノに^求め^られ^しく^凡神^々い^ひあ^らた^り
物^ヲ又^レ在^レ原^友干^ハ何^もハ^レ立^田の^一
意^海あ^らり^かし^ふふ^木の^一そ^らく^後と^一
讀^す是^レを^一叔^父業^者と^いふ^事一^ニ
は^らり^の曲^レか^らり^鏡を^かき^し一^ニ

夕乃從橫傾倒自得のくるくくハ
はるくま物来——ちまよまを筋を連
たあゆまハ中將乃於子晉子ハ二十
九人此連枝也見とをくは句とひさ
ほくま乃乃一理ぬるとえあ指ハ
よく也とはぬく沾述記

能譜乃集つくる事古今
わくくは道此おもて起海
ま時ちの純や幻術の身一や
しつろれ白り魂そら入さ
こゆえよ遊めまに似
海く久くまま
ちくくまらつてあま友此愛

を志しし五徳ハいふよ及も
此らをもしつゝ此處にありな
こちより彼あり上人は骨り
て人を作らしむ詳い純
多の笛を吹せしにあらん侍る
とちされなる人よ成て侍連
やをも五の詳のより終る家は
及魂乃法れともろころよ侍ふ

屋はまきたたまり一為れ入き
もアイウエヲよくしつた
いふれん吟詳いよあめ道
一と離譜よ魂れ入し神
よころとして我翁行脚乃了ら
伴如哉しやる山中よりく
猿より小表をも着せし離譜
乃神をいふまじく侍た

らまら断腸れれをいを叫
しあ神あいに懼る人まの
術なりこれ元うして此
集をつくりて猿とのい
付中しあも是の序を
れ心をこり魂を合せし去来
凡兆乃ほりもたのよまうせ
書

猿蓑集卷之三

隆冬

神し我猿を小蓑をほけ也 芭蕉

あまほけや時あまの夜其鐘の 其角

時あまをさしりしる舞少日 千那

幾人くし我のぬい舞田れ橋 僧 丈州

鐘指の杉振るるしるまき 膳所 正秀

廣江やいり時あま沼を良 史邦

舟人よめりきこふし河ぬれ 尚白

伊賀の境よ入

ちりや奈良の藩乃一時雨 曾良

時ぬもや里まつも屋の窓あり 元北

るりて竹田の里やけし一我 大津 七羽

ふまされ早の支や小夜時ぬ 膳所 羽紅

新田は禪鼓響るし一 伊賀 昌房

いりや沖の時ぬれ去帆片帆 去来

とつおれよひや北半れ早のあ 伊賀 百歳

一いりも動く地なきおれぬ 伊賀 野水

淀よて

とらしに河とれし船の中 其角

歸るるれよも志ん延切し 同

禪とれ雲の首葉や神の目 元北

百舌をのわるびもれ板よ十月 嵐蘭

こがしや頬腫痛む人の形 芭蕉

砂よけ屋簷はくまの冬木立 凡兆

なの〜〜〜

梅座のさきありけり松野をぬ 伊賀 土芳

淡柿をちりめて通る十夜か 膳所 裾道

ちやのさねやばる人あは異色女 伊賀 越人

よのこは徳茶あふゆよおきりる 猿雖

古ちれ簀子も春り 冬りの冬 凡兆

公羽の徳回小室指をゆき

雑水のおもろなうらみ冬こもり 其角

このきさ牡丹のちれさまの裸 伊賀 車来

草津

あひまをさしうらまのこころれ 尚白

神道水にうらまらるる清ら鈴 珠碩

霜月朔旦 伊賀

猪まららふよ物あり 赤栢 良品

水望月れあを狩るや水仙も 羽前坂田 不庄 王

今ハ世を多のひりまや冬の蜂 尾張 貝葉

尾歌のころもとあき海嵐也 去来

一夜ささき姿や釣干菜 伊賀 探丸

こちこち江戸に多加賀此宮井のきき 尚白

茶湯とてつめさ日のも梅石 龜翁

炭竈よも貞北松の倒き 凡北

住つぬ猿のころや 芭蕉 壺火燵

寝ころや火燵蒲團のさめり 其角

門前尾張小室もあうぬ冬至式 凡北

木兔やおもひ切も 茨境 合れ面

こつこつ八張る 伊賀 めもさうんたり 半残

貧文

まーなりと孩子れ切を懐り 大州

浦風や巴をこしす 曾良 衡

あゝ磯やうも到る 去来 友衡

狼のあと踏消すや 史邦 濱千鳥

背門口の入りよのほろりたるれ 丈艸

いしほの雪よまよきて鳴子鳥 千那

矢田の野や浦のあらぬ鳴子鳥 凡北

花土れんたる跡や鷺のあり 木節

水底をうけてまじく魚の小鴨哉 丈艸

るもえも寝かすわら余吾の海 路通

死まで採成らん鷹ははりか 具蒙

襟をうす首引かき冬れ月 松風

ころもや也鎖のきりて冬れ月 其角

かゝるりた蒲團もろりや冬の環 暮年

つんやもさし旅人さむし 石部山 智月

翁の御れあまき衣をあらは
らるる記あり略す

首出してまろ衣んたるやけ衣 竹戸

題竹戸之衣

魚のけねのやせなき氷が 探丸

魚のけねのやせなき氷が 探丸

魚のけねのやせなき氷が 探丸

志のこゝに教珠もおもす潤袋書 文州

湯白砂又候す

膝つきよのりこまのちる霧くれ 史邦

桜榴の葉に教又狂ふあり 伊賀野童

鶺鴒の橋よのこぼす霧くれ 不峰

呼くよと舞愛つんえぬあれ 凡兆

こころれ降る音や朝飯の虫ま 膳所 晝好

こころちや肉ま若れ人六 其角

初音よ鷹部屋のうと朝胡 史邦

赤かひのち吹くやも雪ま 羽知

つまこり丸み粒のち舞ま 探丸

下京やちつむと信濃夜た 凡兆

なま〜と川一ちやちの原 同

信濃路をとこ〜

ちちらや穂屋に後め刈 芭蕉

草庵の留る〜

衰老の若慮もあひて菴れち
其角
高れ日ハ竹の子笠うはちり
尾張羽笠
新とても徒あつた高れち
長崎卯七
ひ川ひてちや雪吹のこま
去来

青亜追悼

乳のこもたせを涙は歸走
尚白
うゝ舞も空也の度なきれ内
芭蕉
鉦も記懐ハ影も似ぬをのり
乙卯

一月ハあゝ米もせをらつたよ
文州

任吉奉納

夜神子や鼻息白一面の内
其角
節季候よ又のうじを舞しれ
伊賀須琢
あやこらひやもまじり
同祐甫

乙卯 新宅

くよ家をこゝせもあハ年忘
芭蕉
弱法師家門ゆるせ餅のれ
其角

歳の夜や曾祖文をひけふ枕 長和
 うす聖れこそはあふくの君 去来
 らきては年結まじけや伊勢の 同
 大とやまはを結る人さる 羽紅
 やりぬれ又やまじりる葦の香 其角
 い絲とくふいさきつ年は暮 路通
 年のくれ破道袴は幾らなり 秋風

猿蓑集卷之二

夏

有明の面おこすやほいさる 其角
 夏すも暑中ちぬや時鳥 本高
 柳を横よる引ひけよほおす 芭蕉
 時鳥りよあまらして折なり 尚白
 何れも何もなき神門揃 凡兆
 しる道なきのこいさす時鳥 智月

蜀魂なくやまの角櫓
 史邦
 入おれしきの中やほろ
 羽紅
 ほろおの涙よりかろのわされ
 丈艸
 ふなき代官屋やほろ
 去来
 こいぬを我塚をあげやあ
 奥^{遊女}品
 松島一見の時あももるや
 春^痛の毛衣とよめりたれ
 曾良
 春鳩や病子身をさるれほろ
 芭蕉
 春^痛とほりかせよかんこる

旅館庭せまき
 庭草をとんす

春^痛の毛衣とよめりたれ
 曾良
 春鳩や病子身をさるれほろ
 芭蕉
 春^痛とほりかせよかんこる

四月八日詣慈母墓

春^痛の毛衣とよめりたれ
 曾良
 春鳩や病子身をさるれほろ
 芭蕉
 春^痛とほりかせよかんこる

別僧

春^痛の毛衣とよめりたれ
 曾良
 春鳩や病子身をさるれほろ
 芭蕉
 春^痛とほりかせよかんこる

翁子流られてすまあしよ
くわいしよ

似合しよけーの二さあはる皇 亡人 杜國

きんしよのむいけーのふ 山嵐

井たすきよはく清し杜あり 半残

起ぬくおのまきねぬ
船の回乃

起くのんうきんかぶつこ 仙化

題去来之塔峨落拈舎 方

豆極る畑もま魚屋を名処 元兆

破垣やわごと麻子れが 道 曾良

南都旅店

誰のそくなくれ部乃国此桐 千那

洗濯やまのよら 尾張 薄芝

豊國よて

竹の子れ力を得よ 元兆

多げれ子や高障り 去来

たげのそや稚よ時の猶 芭蕉

猪又吹入さるるともしくれ 正秀

明石夜泊

蛸毒やとうれぶる夜は月
芭蕉
君の代や筑摩祭を鍋一つ
越人

五月三日
こゝろまゝに書きて

扇の昔いと並てやける菖蒲の
其角
粽はふかき子ふさき
額髪
芭蕉
隈篠の廣きうり
餅粽
岩翁
江戸

さひきに客人やよまづり哉 尚白

五月六日大坂より死の
遠志を吊ひて

大坂や又ぬもれ夏乃み十年
蝉吟
奥加言館にて
伊賀

其草や兵たうゆえん乃跡 芭蕉
這出よかひ屋下れ蟻の影 同

け境をいひこゝろをいひこゝろも
うらな半一也

かこつかり角かりけよ次守鶴石 同

五月あゝ家より控へあゝり
元兆

ひねあゝ味なきそやみりぬ
木節

るとの謂次きありあゝり雨
史邦

奥加名取の郡よみ中宿宮の
塚ハつくもと尋傳きし

道より一里半をよりたり乃方
笠橋といふあゝりとも

あゝりつゞきいゝあゝりあゝり
たのくおゝり

笠橋やいつこみりぬぬり道
芭蕉

大和紀傳のさゝひをそり坂よ
て佐木の次礼をそりそり加

すめあゝりハ料はつゝ
紙のたゝに書つけ伝

つゝりもそりあゝり坂やみりぬ
去来

髪剃や一夜は令情をみりぬ
元兆

日の道や葵似くさ月あゝり
芭蕉

海老もあゝりせりあゝりぬ
羽紅

七十余の老醫みまうりゆり
ゆりあゝりこゝりてたゝくまゝり予
にいつみりの白をけるそり此を醫
いすろりりあゝりあゝりあゝり
る人よあゝりあゝりあゝり
あゝりあゝりあゝりあゝり

なる年よころとしくとさか
ゆるさうりちをたし

六尺も力おとや五月あゑ 其角

百姓も麦よ取つく茶摘奇 去来

志くさや茶山よはまぬれ 正秀

つみ合子たれさげや麦白鳥 游力

孫を愛して

麦き来れ家してやらん雨煙 智月

麦出来て鯉さ喰ふ山や池 花紅

志く川の園さうて

風流のさうめや奥に田植る 芭蕉

出羽のさうと成るさうて

眉掃を面新よしてお粉のふ 同

法隆寺開帳
南無佛のを子を拜す

衣袴れさうまなうしお粉のふ 千那

田の取れ豆つるさうち 螢うれ 伊賀 万宇

膳所曲水之樓まで

螢火や吹こはきこへ燈のや
去来

斐田乃螢見二句

闇の夜や子大泣出と螢の
凡兆
ほつらんや船頭酔ておぼつれ
芭蕉

之熊野へ詣る時

螢火やこあうろよ八鬼尾谷
田上尼

あれもよ物とせりあまぬ
尚白

草むら百合八中こそれの白
半残

病後

空つりやかいらふつ〜百合の糸
大坂 何処

すもやあうりはよ百合の糸
乙羽

錢數辭を作して

子やなん其子の母を蚊の喰
嵐蘭

餞別

ちとまや蚊屋をちるさぬ旅の宿
膳所 里東

うとく成人よれ
氣宮する後者よれむけし

みる夜を吉次冠者よみおし 其角
 障のや蚕の吐く切耳の穴 文州
 下宮や地虫なるは蟬の糸 嵐雪
 客よりや指ぬかゆる蜂の筋 膳所 探志
 好く死ぬるもよんまは蜂の糸 芭蕉
 衣さや盲麻州のさあのは 槐市
 流り魚く藤の花のう流る 元兆
 舟川の書代唱弁り合歡の花 千那

白雲や鐘すゝもく日た夕 史邦

素堂之蓮池邊

白るや蓮一牧の控あこま 嵐蘭
 日焼田や時くくく鳴く蛙 乙卯
 日乃暑さ鹽の底に蟻ウシカくれ 元兆
 水空月も鼻つこあを以教寺即 同
 日の曇やこくく暑さ牛村台 正秀
 寺も暑く心静よんは髪の前 本節

志ねんふの教ぬ 月うあつし

野童

夕るふのうらわしき 異心ゆ

羽紅

青草の湯入るあんなら

巴山江戸

千子の身まわりのうら

まじりてのうらま

つらきうらま

母まゝの小袖を合や五月午

芭蕉

水無月や朝めらぬ夕ま

嵐蘭

志のうらまは涼よる

宗次

すしはや朝まじりて

凡兆

唇よまきつて思のうら

千那

月鉾や思の寂法居

曾良

夕るふや坑並ひて

去来

うらま

吾のうらま今のを比

大坂 之道

猿蓑集卷之三

焔

穉月や蓮花ちううよ花一つ

此句東氏よりきこゆ

素堂

かひらりぬけ初の薫や秋の風

芭蕉屋を何よるれや焔の風

人よ似る猿も身を担秋のせ

不知
読人

松風

路通

琢碩

加賀乃全昌寺に宿す

終夜枯風さくや 意の心 曾良

芦原や鷺の宿ぬおを 婦の風 山川 江戸

あさやめや鬱合 畠に枯の風 凡兆

く川露や猪の臥芝の起あり 去来

大比叡やとぬおを 葉のちほさ 野童

と葉ちりて 跡をかれ 木や桐の苗 凡兆

文目や六百の夜よ 似す 芭蕉

合歡のよれ 葉あうし 心と星のかけ 同

七夕やあまのいづら くらぬし 杜若 伊賀小年

こやこよの宿ま くりたり 相撲取 去来 伊賀

朝ほろと 瘡 眠る言のしらり 風琴 膳所

露やぬこの 蔓れほ すす 及肩

笑のも 泣のもよ 木 榎れ 嵐蘭

手成魚と ねと 木 榎れ 秋風

高地籠ひる 八つ 木 榎れ 千那

柴田よみて

病馬れ夜よむよありて寝て 芭蕉

海老の居る小海老よものしとい 同

加賀の小寺とらむよ多田乃
神社の宝物とて言盛
り菊り草乃のみと曰く
錦のきれをなまき半な
くまのあつうはるお月え

むさんやれ甲のよれきりくす 芭蕉

菜島や二葉れ中の虫れお 尚白

くしあや響よまきつ夜月よ 風琴

いせよまのうてらも時

葉月や名物よ海人よあん 千人

こヶ月に養魚のあま紙くく引り 之道

粟稗と目出なありねく月 半残

月えせん休見の城乃控部 去来

翁を茅舎よちて

ねもくろく松笠のえんよ月夜 土芳

伊賀

加茂よ詣志ては病のかゝるを

かのと人の

たるこのやうに神垣よ
なつてよまゝ

自叙や拍子もも膝のと 史邦

友達の六條はおもひのり
とくまうり

伊賀

影やうらたさるる朝月夜 卓袋

いせ波屋やホノ一し日の朝 乙加

京筑紫を年々月と信守 文州

明風の相もやまよ月一し 凡兆

ぬつてこゝろはあつた月のみ 尚白

向の能さるる月とる葵のれ 魯良

え禄二年つるは漢
月をうけて氣比の明神よ
詣おりよ人の古例を

月清 遊ひのりも 色蕉

仲妹の望猶子を送辭て

いさよ夜の月もつるにやうに 去来

膳所

明月やをよと寺は茶はあつる 昌房

月をまきまき人の砦よりうら
 僧正のいそよの小屋れきぬれ
 卯瀬や鳴門の浪の飛舟
 一戸や衣もやあはこまむし
 釋の植れたる迹——
 洗糟やかきすの喰す荒島
 あやまりてまじうあまの躰
 一鳥不鳴山更幽
 羽紅
 尚白
 凡兆
 玄来
 越人
 正秀
 嵐南

物の音いりたりたしや、薬山の
 むつしき拍もいんそ里津未
 猿枕麻のつと合軒下
 鳩やや洗柿糸の蕎麦島
 としや下るそや梅の大
 鏝釣比のるしセイコ籠つり
 ありあ間のうす通りそり菊塔
 葉を切る跡まじりものなり
 凡兆
 曾良
 千里江戸
 珍碩
 凡兆
 半残
 尚白
 其角

高きもた鷗たかの鳴也さちされ 珠碩
ふみのゆのゆるゆる 柳花 土芳
稻うく母よ出逢ぬうあひや 凡兆

自題落柿舎

梅めや梅らちもあしと 去来
志は浪やゆつく梅の下おるふ 塵生
肌さし竹切りのうすおるふ 凡兆

神田みよ

せんこういれの拍子結あるべ
神田みよの鼓うり音 数足
拍子さくあひま ありとや

花すきと大なるをまうりや 嵐雪
し秋の口五日弱るすきや 文艸
立出る秋の夕や風やら 凡兆
世の中ハ鶴鴿の尾のひま 同
塩臭れ菫よととこ 花嫁の音 荷分

猿蓑集卷之四

春

梅咲て人の怒乃悔もあり 露沾

と鷹の山莊よましく候

梅うきや山路稱入したれあり 去来

しんく香や公入里八半の角加賀 句空

庭真

梅うきや砂利し流す谷真 土芳

くつ蜂屋内月かまきりもの梅のふ 膳所 半残

梅の香や酒のうもひれあはじき 蟬胤

ひびきのまやげ一筋を落のたり 其角

子良銀のほは梅もとどを

ゆ子良子れ一もとど梅のふ 芭蕉

瘦藪や仰りたつ我の軒の梅 千那

灰捨て白梅うもむ垣縁くれ 凡兆

日當り此梅咲くもや屑牛房 膳所 支幽

暗香浮動月黄昏

入相の梅はなりぬしらまきくれ 風麦

武江よおももむく寝亭の 残夢

寝るるもい窓のぬ月や闇の梅 乙卯

辛未の... 梅の... 白梅... 寝るる... 乙卯

よき〜まゝにきて候ふけしき
もて人いふも風雅を忘るるや

夢をいひて又一白ひやうはは梅 嵐蘭

百八の〜いふは高のむめ 其角

ひら寝も能宿と〜人初る日 去来

野田や厚造のひ〜摘る菜 史邦

とら市やちふ漕も〜の菜糸 嵐蘭

お月あは〜のDawn也 如行

憶翁之客中

裾おて草を〜と〜草枕 嵐雪

つ〜す〜踏付か〜も〜るや 路通

七種や跡〜〜朝〜らす 其角

象車や鞆の〜〜根芥也 丈艸

うす〜のや〜〜斧のふ 其角

膝と衣れ〜〜に目あ〜れ 同

袴〜も〜〜とあれハ掛なり 去来

鶯の舌踏落す〜垣種あれ 一桐

伊賀

雪やう座一おれ志ころりふ 江戸 溪石

うらふすやを詠あうれふ 其角

鶯や下駄の歯よつく小田代土 凡兆

雪や窓よ冬をすすえあう 伊賀 魚目

や梅の雪柳をうりいす 江戸 探丸

け溜ハさよの持き柳 卜宅

垣うにうへてくれす柳 遠水

よさふ 極まれよ柳 尚白

青柳の志よれや鯉の位所 伊賀 一啖

雪けや鈴いす場乃す 木白

待申乃正月もやうり月 揚水

田や水よつらて

まめいにかの 猫の手あ 芭蕉

うらまの 切時 猫の意 越人

うきいふよ 福の 去来

露沾公よて餘寒の當座

春のよきことめ羽織の
 尚白
 雲のあはれちりし
 龜翁
 出らり下櫃のあまの
 嵐雪
 空をわたりし物あり
 凡兆
 骨葉のかげのよき草
 其角
 白鳥や海苔のふり
 尾張
 松峯
 人のよきことめ
 元志

陽炎や取つてあはれ
 荷分
 わけはあはれ
 百歳
 かけりやほろの
 土芳
 いとゆめのことあり
 伊賀
 氷固
 歸るよきことめ
 凡兆
 おひはあはれ
 伊賀
 芭蕉
 いとゆめのことあり
 配力
 狗脊の塵よきことめ
 嵐雪

彼岸よりさむさむ一夜二おろ 路通

ふのちや帯けありきて涅槃像 野水

花並ぬ裏ハ燕乃かうひ道 凡兆

立さうく今や紀のくせの居 沢雉

春あや厚ひの山草ふ花咲ぬ 嵐虎

ふらふら

長あや山より出るる猿門 猿雖

不性さ金わさ起され春のぬ 芭蕉

春あや田裏のしまれ離賣 史邦

とらふあめのあるや軒ある花 羽紅

泥垂や苗代水の睦つらふ 史邦

蜂とまのる本舞の竹や虫の糞 昌房

振あや下座またのをさる去来 去来

春風よこすれ雛の喧騒の流 萩子

桃柳らりありあけやをんるれ子 羽紅

ふらけお境志まのらぬさうの 鳥巢

三川

里人の晴落しとる田鴨のれ 嵐推

蝶のまきく一夜寝たより葱のほ 加加山中 半残

帟喜切く白根う靴をの束 伊賀 桃妖

いのぼりうもすもや濼 園風

目の新やこもくれよの親すめ 珍碩

その鞆ぬむ妻のすもや縁のえ 土芳

畠の夜や果成まこりてあく衝 芭蕉

越より飛浮くかとして鶯の
うらのあやもこころうし道も

るまきいんあき
さまのひんく

鶯の巢の樟の枯枝よ日ハぬ 凡兆

ふすまよりんえんさき 伊賀 石に

子や待ん餘りそまはのさあり 枚風

ひらりあくゆれ拍子や雛まのさ 芭蕉

芭蕉菴のふまきを新

草草小鋸洗くあやられ 曲水

木瓜筋旅してんく世あぬ 山店

畫讚

山吹や宇治の焙炉は白ふ時

芭蕉

白玉れ高又まつく様れ

車来

わらわりのまじりやまひら
ありたれハ髪けりてんも

もつととけき
まの成りて

筍もくも昔やちり様

羽紅

津國宗

蝸牛并りせせりてんま

坂上氏

うぐいすの笠や〜る椿

芭蕉

とろとろま〜んてんら

伊賀 利雪

東叡ふよあうぬ

小坊主や杏あつきてん

其角

一枝ハゆめ〜り〜んは

尚白

雛の卵もま〜いゆ〜や

凡兆

ま〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

丈艸

ま〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

史邦

さ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

千那

葛城の梅をよそをよそ

程うさしあまぬけ神の顔

芭蕉

いこの園花垣のたはらのついで
あまの乃ハを梅花料は階
らまらると云傳えらんを
れん

一里ハこれ花守のち孫や

亡父の墓東武谷中にもり
三歳とてあれ九年のほろ
城よとてあぬ墓のおも梅枝を
伝ふりかひく母おわること
つててろ此梅をたつて後らま
他の墓程さると云傳えらんを
れん

まうや花及び蜂の性還り

園風

知人よあまらしくとあ見れ

去来

ある僧の嬉ひ一あふ顔れ

凡兆

浪人のやとまら

嵐を春の夜あれう花翹

半残

醒もさうれつれ中れゆあへ

長眉

これも奥もさや
のに伝えらん

大宰やのれ奥乃あのみ

曾良

伊賀

道灌山よのいほ

石の窟やあまのうのつむぎのふゆ 嵐蘭

源氏の跡をたづね

標干に夜ちるふれ立すゝゝ 羽紅

庚午の歳家を繰え

後よりりけきもたちりけま 北枝

とれらるや伽藍の樞をりけ 凡兆

海棠たれと満より夜の月 普船

大和の脚乃とま

草臥くちるるはやあのみま 芭蕉

ふらや躑躅よけち尾のひび 探丸

かきつー海ふらんまや夕日影 智月

兔角して卯まつあむひ跡ま 山川

陶鳥のおしやうめさのつとれ 式之

木曾塚

其まの石ともなるは木曾れる 乙羽

春は花夜をくらげの初殿の堂に於 曾良

望湖水惜春

けまきよをいひのくを押しさるる 芭蕉

猿蓑集卷之五

去来

鶯の羽を刷ぬまろく 紀

一ゆき風は木の葉志のしるる 芭蕉

股引の朝うぬや川をえて 凡兆

たぬきこころとす 篠張のさら 史邦

まいごころは雪の遠く 家齊月 蕉

人よもられす 名物の梨 来

ちんちんちん 里王路や〜 雄雉
ちんちんちん ちんちんちん ちんちん 足袋
何事とす言の西に志つゝあり
里のんえお〜 午の貝ぬ〜
ほつちんちん 去年の袖こまの泣く
芙蓉花をれの〜 ちんちん
吸物と先出ま〜 せん
三里あ〜 ちんちん 道〜 せん
来 蕉 邦 兆 蕉 来 兆 邦

この春も盧門の男居あゆ
〜 ちんちん 月夜の夜
苔あ〜 ちんちん 水鉢
〜 ちんちん 七節の服も
〜 ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん
ちんちん ちんちん 鳴は北風
火と〜 ちんちん ちんちん ちんちん
〜 ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん
来 蕉 邦 兆 蕉 来 兆 邦

瘦骨れまゝ起あすかなる
 隣をりりて車引くこむ
 うき人を枳殻垣よりかきん
 いまも別のかさし出す
 せりけい掃てしらを掃ち
 おもひ切さる死るるひんよ
 青天よ有明月の船やけ
 湖水の秋の比良れとるれ
 蕉 来 邦 兆 来 蕉 兆 邦

柴のさや蕎麦ぬすまぬ歌をよ
 ぬのこ名智ぬ風枯たらし
 押合て穴殺くは又きつらほ
 くらけやあまの赤きさ
 一掃鞆つくる意のこれ
 枇杷の古をよは木芽の枝り
 邦 兆 来 蕉 兆 邦

去来九

芭蕉 九
凡兆 九
史邦 九

市中、物のよほらや五此月
あゆしと門く乃教り 芭蕉
一番草一取の果る種なき 去来
灰らしとくくある一枚 兆
け筋、銀も見えす不自由さ 蕉
たといやーに長子招指 来

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 芭蕉, 凡兆, and 史邦.

草村の蛙こころのまじりて
落のさすそりたけ地ゆゆす
道心のねらひあはれつるまじり
能やれ七尾の冬は夜うき
魚の思ひたふさる道の老を
待人入る小舟の鏡
まじり屏風を倒す女子を
湯屋の竹の筍子伝へて

蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆

茴香の香を吹かす夕風
僧やさむく音なりて
ささりの猿とむすねの月
冬に一むの地よこさや
五^各六本よまつげの家^{ミツタリ}階
は杖をさし思はるる
追ふて早よ思ふの刀持
てららそ何し水もほり

蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆

元障子もむしりかきしの賣敷
 来 蕉
 こんちやうのちりいつくさつ
 来 蕉
 こころと草鞋を伴る白障子
 来 蕉
 蚤をむしりよ起し初秋
 来 蕉
 そのまゝにころもいなるお座
 来 蕉
 ゆふに蓋のありぬ半櫃
 来 蕉
 草庵は暫く捨ておやあり
 来 蕉
 いらぬを撰集れと
 来 蕉

ちよとふ器のちよとふ器
 来 蕉
 は舟の早ら皆小可なり
 来 蕉
 むにあり粥すも海を
 来 蕉
 舟にぬきこむとて舟に舟を板敷
 来 蕉
 舟にぬきこむとて舟に舟を板敷
 来 蕉
 舟にぬきこむとて舟に舟を板敷
 来 蕉

元兆 十二

芭蕉 十二

去来 十二

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 芭蕉, 去来, and 凡兆.

凡兆

灰汁桶のきやまらふも

あゆみかすりて宵寝する秋 芭蕉

新玉をまかりたる月けふ 野水

あつて蟻し 十のさるき 去来

糸代経へき物を極子問て 蕉

号はきりたひくきと清る 兆

葉出て眩^ウ又餘る春の物
来
摩耶^ウの根^ウを^ウ花^ウに^ウ結^ウ
水
ゆめ^ウに^ウ夢^ウす^ウ念^ウハ^ウ風^ウ薫^ウ
北
蛭^ウの^ウ心^ウを^ウま^ウり^ウま^ウり^ウて^ウな^ウ味^ウも^ウ
蕉
その^ウお^ウの^ウこ^ウら^ウよ^ウさ^ウひ^ウま^ウり^ウて^ウ花^ウに^ウ結^ウ
水
定^ウせ^ウし^ウも^ウい^ウ後^ウの^ウり^ウの^ウあ^ウも^ウ
来
金^ウ鏝^ウと^ウ人^ウの^ウよ^ウふ^ウい^ウお^ウの^ウや^ウま^ウ
蕉
あ^ウの^ウ風^ウを^ウよ^ウさ^ウひ^ウま^ウり^ウて^ウ花^ウに^ウ結^ウ
北

町^ウの^ウ林^ウの^ウ文^ウ好^ウ响^ウや^ウま^ウ
来
何^ウと^ウつ^ウら^ウる^ウよ^ウの^ウあ^ウら^ウま^ウり^ウ
水
若^ウや^ウち^ウる^ウ身^ウの^ウ西^ウ念^ウり^ウ衣^ウを^ウた^ウて^ウ
蕉
木^ウ等^ウに^ウ酢^ウ造^ウよ^ウ春^ウの^ウた^ウれ^ウつ^ウ
北
名^ウの^ウや^ウい^ウ山^ウ陰^ウ借^ウよ^ウ四^ウ十^ウら^ウ
水
柴^ウの^ウ家^ウの^ウし^ウひ^ウを^ウつ^ウら^ウ
来
み^ウの^ウあ^ウの^ウあ^ウの^ウあ^ウの^ウあ^ウの^ウあ^ウ
北
旅^ウの^ウ地^ウを^ウに^ウ有^ウ明^ウ一^ウま^ウり^ウ
蕉

よき御もい女れ御もい
何れもいよ 狼乃ち
夕月夜長の萱の法殿
人もあまのあまの
くそつきに自慢をせし
又もたのれ部を
堤より田の音や
加茂のやうに

来 水 蕉 北 水 来 蕉 北 水 来 蕉

物よりれ尾御
雨のやうにれ
昼祈り
志より水は
糸梅殿
春の三月

来 水 蕉 北 水 来 水

九兆 九

芭蕉 九

野水 九

去来 九

餞乙卯東武行

芭蕉

梅の葉まゝに花のさけ汁

かさあしりーそ春の暁 乙卯

五雲雀あゝ小田の土持はる花 珠碩

志しき程をて下さぬより来 素勇

所隅の虫歯うそて春の月 卯

二階の窓をよめよあき 蕉

放やうつこれ踏んむせす
縮の原延乃力ちきしうせ
あつしんれ初さけは鏡麻と
に花頭も昨あうはれ
卯の刻の真身に並ぬお方
すまきこの木の志のつるあかり
萩のれすまのれよまのて
荏りこのよの百古名の一歌
男 碩 劬 蕉 碩 男
智月 劬

懐よふをわあむの月 凡兆
ゆさしまあふのあつら 劬
鏡の柄よとすうつるふのれ 去来
灰まのしらすかりあ跡 兆
^名 五月は佐藤てくる理机 正秀
店をおらふ佐のふらり 来
汗ぬらひ踏のころの初糸 半残
られせうまの難乃下 土芳

大膽におもひつゝ
 身はわれはれの取所
 小力乃蛤又なる
 柳は火とす大卒の夜
 ろもゝらねり夜は
 此ももれぬもろる
 碧油福をせし
 残 芳 残 園風 猿 雖 風 雖

咳おの隣はらき縁つと
 流へらうよほもろ
 形はもろもろもろ
 うもろある舟の割下
 花もろもろもろもろ
 雛の枝をよほもろ
 芳 風 嵐蘭 史邦 野水 羽紅

芭蕉 三

乙卯	五	土芳	三
玆碩	三	園風	三
素男	三	猿雖	二
智月	一	嵐蘭	一
凡兆	二	史邦	一
去来	二	野水	一
正秀	一	羽紅	一
半残	四		

猿叢集卷之六

幻住菴記

芭蕉州

石山乃奥岩向のうらゝ山を
 國分山と云ふは、國分寺の名を
 傳ふた。一、林廬の洞を流を渡
 りて翠巖と云ふ。三曲二百歩
 に行くと八幡宮ありて神体
 小跡隠乃る像とや唯一の家あり

甚るる事をも两部光成和け
利益の塵を同く志なきも
又貴く日比ち人の諸よりこれ
いと神さむ物志つらある傍に
捨く草の戸もよき根筈軒
まゝく屋のまゝり壁もて狐狸
婦しをさゆり幻後菴と云あり
の傍ありく勇士菅沼氏曲水子と

伯父よあんゆりをも今八年
ひくく成く心よ幻恒を人の名を
のこ孫せり予又市中をさる事
し平計ゆりてみ十年でちま
又無き養虫のみのを先くひ蝸牛
家や離て奥羽家沼の異るを日
り一面をさるる事ありあゆ
くくし北海の荒磯よさるひ

破りてと歳湖水の波は漂雪の
波草の流とくもくもくは
乃陰多のそく軒鴉炭ある
免垣の結流あつて卯月
神いとうらうめい入一山
しとくおもひうらぬさ
の名おもたきうらつて
山麓春の舞う時を志す

宿宿りし為れば後さし
のほろろとく
たしとうらうめい真一
南ようらうめい身ハ
とく未申ようらうめい
らとく南董家
北風海を渡して涼日
たる松の幸縁の松を
る橋を初る

木樵の影林扉の小田より早苗とる
奇雲飛ふ夕雲れ空よ水鶏は
知音羨景物とてあはれと云事
わし中あも三上山ハ士々此侍よ
かよして武花おも古て扱もあひ
いしき田と山よ古人をとうぬさか
り山嶽千丈の峯袴腰といふふる黒
洋の里いといふ路ありて獨代き

よろしとよみさるん系系集の深あり
りり杉眺るまふ戸ありと舞とたの
家よ遠のほり松の棚作葉の田産
をよあそ積の腰掛と名付彼海棠
よ果をといふあひ主屋あまの巻を
結つる王翁除衾、徒よあはれ唯睡
辟山民と成て居る顔よ足よあけ
あし空山よ風を扱て座すよま

くしやまのあはれする谷の清水を
汲く自ら飲くことの喜びを
一がの備いしうりまの昔伝ふ人の
話よりしるす後みちりてあはれ
おぼやかしむおぼやかしむ
の物おぼやかしむおぼやかしむ
しりしはまの籠茶のうらみの僧に
かたの甲斐のうらみの巖子とて

洛よのほりいまうらみあはれ
して額をとくしむとて
深く幻住庵のこころを
草庵の記念のあはれとて
と旅寝のこころの器とて
をりしはまの籠茶のうらみの
枕の上はねあはれとて
ぬくこころを動かしあはれ

里のわのこた入まるといのちのちの稲
くさあー兔の豆畑よりよあや
あやああ農談日廐よ山の路ふ
くまら夜屋静よ月を待つ
影を待つ地を取てい岡雨よ是我
をいふよいこいよいこいあふ
深寂をぬい山野よ路をかくと舞
とよあーいや病文人よ供てむ

をいふ一人よ似ら借年月れ
梅こゆを身れ行をぬあよ
あーあう紅官魚合れ地をう
やうい六佛離祖室の廐よ入
ら舞とせしむらなよ月を
よあよせめ花鳥も情を芳し
暫く生屋のちら事とああわ
ぬい母を張る方とくしあいあ

る樂天ハ五聯ノ神をやりの老松ハ
瘦より賢愚文質のこころ
ふもいつまう幻のあまや
ゆるいゆきぬぬ

えののこ推れいもるまふま

題芭蕉翁國分山

幻住菴記之後

何世無隱士以心隱為賢
也何處無山川風景因人
羨也間讀芭蕉翁幻住菴
記乃識其賢且知山川得
其人而益羨矣可謂人与
山川共相得焉廼作鄙章
一篇歌之曰

琴湖南兮國分嶺

古杏鬱兮綠陰清
 第屋竹椽總數間
 內有佳人獨養生
 湍口錦繡輝山川
 風景依稀入詠城
 此地自古富勝覽
 今日因君尚益榮
 元祿庚午仲殊日 震軒具州

儿右日記

海を北舟中へてやる林麻のれ 曲水
 くのさ先代跡志つやまの山 野水
 鶏もくくく時々の鶏たもく 去来
 海の五月雨うぬや一くくく 元兆
 軒ちりもさる葉おるれ猿のあ 千那
 細腰れやとめあひや友のまよ 珍碩

贈紙帳

おもゆる紙帳よりわらわの 野徑

いりまて露の床よりおの 里東

管の魚をたよむけのさ 乙劬

顔や岸の中は花うら 怒誰

魚をく一室より読む 探志

五羽六羽菴のまじり 元志

本つきたつて鳴る水 泥土

笠あやむ相すーや 史邦

月影や海を庭目にたす 正秀

志つらさい粟の床を洗む 柳陰

涼さやとらに米む 如行

訪は留らまあり

椎のふもろくさ啼や 朴水

月た下やよはぬ程は 市隠

文よ云ふす

膳所もや早苗のしほは 半残

膳所

美濃垂井

膳所

麦の粉を吐度す

一袋くねや鳥羽田のこゝ 麦 之道

書音

一復入るふさふさや露のしよ 長崎 魯町

夕立や梅木の身れ一とさうり 及肩

昇猿梅掛

梅のや田上ふれくらふらうり 尚白

贈箋

志々あいまあみらい 北枝

木履めく侍ふせり 木節

包紙の書

雫よす茶袋や 膳所 萩の露 扇

稲のふられを 智月 佛は土産の

石のやひそ 羽紅 果せし 妹の風

梅の梅や 昌房 さらば 望をむより

黒ハ 何処 ちのめり 何処 さまれあつさ

啼やい〜
越人

越人

等哉

明年

嵐蘭

同其

曾良

跋

猿蓑者芭蕉翁濟誓之首髻也
非比彼山寺偷衣朝市頂冠笑
只任心感物写興而已矣洛下
逸人凡兆去来随翁遊学楮館
竹窓躡等凌節斯有歲屬撰此
集玩弄無已自謂絶超狐腋百
裘者也於是四方吟友憧々往

來或千里寄書々中皆有佳句
日蘊月隆各程文章然有昆仲
騷士不集錄者索居竄栖為難
通信且有旄倪婦人不琢磨者
廉言細語為喜同志雖無至其
域何棄其人乎哉果分四序作
六卷故不遑廣搜他家文林也
維收元祿四稔辛未仲夏余掛

錫於洛陽旅亭偶會兆來吟席
見需記此更題各尾卒援毫不
揣拙庶幾一藁高張有補于詞
海漢人云

風狂野衲

丈艸漢書

正竹書之

